
日常トリム

つぶやきここえ & くがつあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常トリム

【Nコード】

N9166S

【作者名】

つぶやきこごえ&くがつあき

【あらすじ】

日常トリムは月ごとのイベントをテーマにした日常を文章と絵で切り取ったオムニバス作品です。

四月一日の道化（前書き）

エイプリルフールのお話です。

挿絵を入れてみましたがあくまで試験的なものであるため、見づらいかと思われます。画像の大きさなどに関してもご意見などいただけると幸いです。

四月一日の道化

四月一日。

部活で春休みの学校を訪れていた私はそのついでに、友人の忘れ物を取りに教室へと向かっていた。

わざわざこんな日に頼んでくるあたり、私を騙す嘘なのではと疑ったのだが、どうやらそういうわけでもないらしい。

結局、素直に友人の忘れ物を取りに行くことにした私は、たどりに着いた教室で思いもよらない人物と遭遇する。というより、誰かがいることさえ思いもよらなかった私は、正直かなり面食らった。相手はというと、やってきたのが他ならぬ私だったということに驚いたのだろ。その口から「嘘だろ」という呟きが漏れる。

彼の名前は水下修治。私、木崎晴子の幼馴染である。そして彼の呟きは、お人よしで馬鹿者の彼の昔からの口癖だった。ただ今回に限っては、疑念というより彼自身の願望を口にした言葉だったのかもしれない。

頼まれて仕方がなく友人の忘れ物を取りに來ただけなのに、まさか存在の消滅を願われる羽目になるとは。こちらこそ嘘でしょと呟きたくなる不遇さである。そもそも部活に入っていない水下が春休みの教室にいる方がよっぽど嘘か何かのようだった。

「春休みだっていうのに、なんで教室にいるの？」

不思議に思った私は窓際で固まる水下にそう訊ねてみた。誤魔化そうとしてか、彼は質問で返してくる。

「そういう木崎は、どうして教室にいるんだ？」

「私は部活。と、ついでに志藤に頼まれてあいつの忘れ物を取りに來たの。で、水下は？」

あっさりと答えた後で、再度質問を投げかける。観念したのか、水下は歯切れの悪い調子ながらも白状をした。

「いや、俺も忘れ物を取りに……」

答える水下の目はこれでもかというくらいに泳いでいる。すぐに嘘を吐いているのだとわかってしまった。そうでなくとも、一向に忘れ物とやらを探そうとしない時点で嘘なのは明白である。

さすがにこの程度の嘘で騙されるのも白々しく感じた私は

「どうせ吐くならもう少しマシな嘘を言いなよ」

と進言した。私の言葉に、水下の表情がまたしても驚きに染まる。

まるで「嘘だろ」とでも言いたげな面持ちだった。あの嘘で騙せると思っていたことに対して私も同じことを言ってやりたい。

黙りこくる水下をさて置きつつ、程無くして友人の忘れ物を鞆にしまった私は、埒が明かないと感じて思い切って訊ねてみることにした。

「誰か待つてるの？」

何をするでもなく、一人教室にいる理由といえそれが妥当であろう。そしてその後のことも、概ね見当が付く。

肯定も否定も、誤魔化すことさえもせずに押し黙る水下に私は続けて聞いた。

「ひよつとして、さやか？」

水下は沈黙を保ったまま。私の質問は続く。

「告白するの？」

その問いを最後に、私も口をつぐむ。やがて、やけに重たい沈黙を、決意するかのような間を持たせた後で水下が破った。

「……告白した」

私が全く予想だにしなかった答で。

「……え？」

私はついついそんな間の抜けた声をあげていた。改めて訊ねようとするも、何から訊ねるべきか迷ううちに、水下が先んじて恥を忍ぶように俯き言っ。

「寺石に告白して、フられた後だよ」

どこまでも沈んだ水下の声。思い出すことさえ苦痛な程ショックだったのが窺える。

寺石さやかとは私と水下の共通の友人で、この一年間同じクラスで多くの時間を共にした女子だった。特に馬鹿正直で騙されやすい水下は、嘘を吐いて人をからかうのが大好きなさやかにとって格好の獲物だったようで、しょっちゅうその相手をさせられていた。

そんな彼女にいつの間にか水下は惹かれていき、そして今日告白をしたのだそう。しかも既にフられ済み。もう長い付き合いになる私もそうそうお目にかかることのない落ち込みようだった。

「ふーん。そっか」

私は私で一人勝手にショックを受け、そんな返事をするのがやっとだった。

水下がさやかのことを好きなのは気が付いていた。今更それを知ったところで、別段ショックを受けるようなことではないはずである。

だというのにショックを受けてしまうのは、きっと心のどこかで水下が否定してくれるのを期待していたからなのだろう。彼の口からさやかが好きではないと聞きたかった。その一言が聞きたかったがために、よせばいいのに質問をした。その拳句、真実を知り一人で落ち込んでいる。

それならいつそ聞かなければよかったのだ。水下の下手な嘘に騙されたフリをして、さっさと部活に行ってしまうのが賢い選択だった。そうすれば、まだ真実を知らずにいられた。

それでも、聞かずにはいられなかったのは、つまり、私が水下のことを好きだったからということなのだろう。

水下への本当の気持ちを、他ならぬ彼の口から聞いたことでそのことに気付かされるとは、なんとも皮肉な話だと思った。

いや、本当はもっと前から気付いていたのかもしれない。ただ単に認めたくなかっただけなのだ。

「ねえ水下。さやか、断るときに耳の後ろ辺りを触ってなかった？」
「触ってたと思う。でもなんでそんなことわかるんだ？」

唐突な私の問いに、そのときの情景を思い出したのか答える水下の

面持ちは一層暗くなる。そんな水下に「いいこと教えてあげる」と前置きした後で、私は彼の知らない、とっておきの情報を伝えた。

「さやか、嘔吐くときに耳の後ろ辺りを触る癖があるんだよ」

「え？じゃあ……」

数秒かけて私の言葉をじっくりと理解した後、水下はそのことが示す事実にとどり着いたらしい。

さやかは水下の告白に嘘の返事をしていた。つまりそれはさやかもまた、水下のことを好いているということを示していた。

当の二人がお互いにそのことに気付いていなかっただけ。気付いていたのは私だけ。私だけが、自分の気持ちが報われないことを知っていた。

だから自分の気持ちを認めようとしなかった。

認めなければ、報われないとしても傷つかずに済むと思っていたから。

「今日ほどあの子の嘘に気を付けないといけない日はないでしょ。

何回さやかに騙されたら気が済むの。ほら、さっさと追いかけてもう一回告白しなよ」

茫然としていた水下は、私のその言葉に鞭打たれたように走り出した。相当焦っているのか、机と椅子にあちこちをぶつけながら教室の入り口を目指す。見ているこっちにまでもどかしさが伝わってくるようだった。

勢いそのままに教室を飛び出していかと思われた水下が、不意にこちらを振り返る。その顔には先程の憂いがなく、ただ、穏やかな笑みをたたえていた。

「ありがとう。木崎」

そして恥ずかしげもなく、大真面目に礼を言う。昔から少しも変わらない、お人よしの馬鹿者。

そんな彼を好きになった。その想いが、認めざるをえない私の真実だ。だが今更それを告げられるはずもない。

私の本当の気持ちを伝えたところで、水下が笑顔になるわけでは

ない。それに、彼が今笑っているのは、さやかの本当の気持ちを知らることができたからなのだ。

私の役割はさしずめ、偽りの気持ちの下で泣きながら、彼を笑顔にする道化といったところだったのだろう。

それでもいいと思った。

「気にしないで。……あ、それとき、水下」

それでもいいと思ったのに、私はそう呼びかけていた。

今日という日が四月一日、どんな嘘も蔓延り跋扈するエイプリルフルだったからだろう。

「……私、水下のこと好きなんだけど」

私の、十数年大事に持ち続けた、けれどもずっと、見て見ぬふりをしてきた嘘偽りないその想いは

> i 2 5 0 4 9 — 3 2 4 5 <

「……なんて、嘘」

こんな形でしか伝えることができないと思ったから。

「……こんな嘘にもひっかって。そんなんじゃまたさやかに騙されちゃうよ」

呆気に取りれたままの水下をからかうように私は言う。対する水下はいたって真面目な顔で

「……そういう嘘は好きじゃない」

と呟いた。この一年、さやかに幾度となく嘘を吐かれていた水下の口から出たとは思えない言葉に、私は少々戸惑いを覚える。

それもそうか。

好きとか嫌いとか。そういうことは嘘でも言えなかったのだから。「ごめん。でもエイプリルフルだからさ。さやかのことも許してやってよ」

誤魔化すように私がそう言い繕うと、水下は何か言いたげな顔をした後で、しかし何も言わずに立ち去った。その足音が遠ざかり、やがて聞こえなくなる。

「……嘘でしょ」

思わず水下のように眩いていた。目の前にある現実に対する疑念ではなく、願望を口にした言葉。

誰もかれも嘘を吐くエイプリルフールなら、現実の一つや二つが嘘になったっておかしくない気がしたのだ。

ただ、何が嘘だったらよかったのか、わからなかった。

さやかの水下への想いか。水下のさやかへの想いか。私の水下への想いか。

いつまで経っても、答は出そうになかった。

四月一日の道化（後書き）

オマケへ続く

四月一日の道化 オマケ（前書き）

本編より文字数が多いというオマケとは名ばかりのモノとなっております。

舞台は本編の七年後。本編に名前しか出てこなかった人物も登場しております。

四月一日の道化 オマケ

「っていうことがあったのよ」

そう言つて、思い出話を締めくくる。七年も前の出来事だと言うのに、語り出すと記憶というものは次から次へと蘇るもので、気付けば長いこと一人で喋り続けていた。渴いた喉をぬるめの紅茶で潤しつつ、向かいに座る聞き手の方を覗くと

「なるほど。で、水下と寺石は付き合うことになったと」

と、彼は更に思い出話を総括するように言つた。感想らしい感想はないらしかったが、時折のぞく憂いの表情が、彼の心の内を如実に表していた。なんとも彼らしくない表情だと私は思った。

彼の名前は志藤謙介。高校一年生の頃にひよんなことから知り合い親しくなつた同級生である。二年生になると、陽気な彼は私の幼馴染にして馬鹿正直者の水下修治にちよっかいを出し始めた。そこに嘘が大好きなクラスの女子、寺石さやかが加わり、それ以降は私を含めた四人で行動を共にすることが多くなつていった。

イベント好きで陽気な性格の志藤の行動力は止まるところを知らず、私たちどころかクラス、ひいては学年学校全体を巻き込んでいき、結果的に私は多くの騒動の中心に関わつていくことになる。当時こそ迷惑極まりないと思つたものだったが、今となつてはどれも良い思い出となつていた。

とはいえ、つい先ほど彼に話していたのは、とても良い思い出とは言いがたいものだつた。七年前のエイプリルフル。三年生への進級を控えた春休みに起こつた失恋の話である。

部活で春休みの学校を訪れた私は、そのついでに忘れ物を取ってくるよう志藤から頼まれた。そうして訪れた教室で私は水下に遭遇する。水下は想いを寄せていたさやかに告白し、フられた後だつたのだ。

しかし水下の話から、私はさやかが嘘を吐いていることを見抜い

た。そうでなくとも、さやかが水下のことを好いていると私は知っていた。だからこそ私は、水下への恋慕に気付かぬフリをし続けていたのだから。

私はさやかの吐いた嘘を水下に教え、改めて告白をするよう告げた。自らの気持ちには嘘を吐いて。

結果、水下とさやかは恋仲となり、私は嘘だと偽ることでしか自身の想いを告げられず、その後も偽りの気持ちの下で涙を流し続ける羽目になるのだった。

志藤はというと、あの日何があつたのかを私たちに訊ねることは決してしなかった。結果だけを受け止め、ぎこちなくなつた私たちの仲を取り持つように尽力し、更には周囲を巻き込んでまたしてもお祭り騒ぎを始めたのである。おかげで私は水下とさやか、二人の大切な友人を失わずに済み、卒業まで以前と変わらぬ日々を送ることが出来た。そして今も、水下とさやかとは連絡を取り合っている。

志藤とも相変わらず仲良くやっている。しかしながらもう長い付き合いになるにも関わらず、私も彼も中々あの日の話題に触れようとはしなかったため、私は彼に礼を言うことさえできずにいた。

久しぶりに都合を合わせて再会した今日、思い切つて礼を言つてみたのがつい先程のことであり、志藤はあの日に何があつたのかをようやく訊ねてきたのだった。

「あの時はごめんね。忘れ物を届け忘れちゃつてさ」

今の今までの日のことに触れてこなかったものだから、これから先も話題に上がることはそうないだろうと感じた私は、お礼と共に言いそびれていた謝罪をすることにした。あの日私が志藤の忘れ物を届けずにいたせいで、彼は新学期早々教師から大目玉を喰う羽目になったのだ。本来なら志藤から責められてしかるべきだったのだが、当時の私の心境を察してか彼はそうしなかった。それが気がかりだった私は、今更ではあるものの恨みごとの一つや二つを甘んじて聞くつもりでいたのだが

「謝るのは俺の方だよ。俺のせいでそんなことになつたんだから」

志藤は文句を言うどころか、頭を下げて私よりも申し訳なさそうに謝るのだった。思わぬ反応に戸惑いつつも、私はきっぱりと言う。

「何言ってるのよ。私、志藤のせいだなんて思ってるわ」

確かに、あの日志藤に頼まれて教室に行っていなければと考えたことがあるのも事実だ。当時、同じように謝られていたとしたら私は志藤にあたり散らしていたかもしれない。

だが志藤が頼みごとをしたのは偶然なのだ。彼が責められる道理はない。それくらいは志藤にもわかっているはずなのに、と私が訝しんでいると

「……あの日、水下が寺石に告白することを、俺が知っていたとしても、か？」

志藤は躊躇いがちに、そう問いかけてきた。

「え？」

理解が及ばず私がそんな声を上げると、志藤は覚悟が決まったのか、顔を上げてから事の次第を詳らかにしてみせた。

「俺は、水下が教室で寺石に告白するのを知っていて、木崎に忘れ物を取ってこさせたんだよ」

つまりあの日の出来事は、決して偶然などではなく、志藤によって引き起こされたものだったというのか。志藤の言葉をようやく理解まで漕ぎつけた私は「……どうして？」という問いをかううじて紡ぐ。

「お前が水下のことを好きなのは知ってたから。そのことを水下に伝えるチャンスくらいあってもいいんじゃないかって思ったんだ」
志藤はそこで一旦区切り

「それが余計なことだったって、今は本当に申し訳なく思ってる」
私の目を真っ直ぐに見て、改めて謝罪の言葉を口にした。そんな彼の姿に、私はやるせない気持ちでいっぱいになる。

私は、志藤に謝ってほしくてあの日の真実を語ったわけではない。たとえばあの日の出来事が志藤によって引き起こされたものだとすると、彼はその行為を悔いて私たちの仲を取り持ってくれた。私が言

いたかったのは、その礼だったというのに。

「やめてよ、もう。別に、後悔とかしてるわけじゃないんだから」
私はわざとらしいくらいに明るく、志藤に向けて言った。そうでもしなければ、彼は己を責め続けることになるだろう。それを止めることが出来るのは、あの日の当事者である私だけなのだ。

しかし志藤は納得のいかないと言った風に表情を険しくする。その様子にますます戸惑う私の目をしっかりと見据えて、志藤は告げた。

「自分じゃ気付いてないのかもしれないけどな。お前、嘔吐くときまばたきが速くなるんだよ」

「嘘」と聞き返すと

「本当」と素早い切り返し。それから小さく嘆息する志藤。さも、やっぱり気付いてなかったか、とでも言いたげである。

「今後悔してないって言った時も、まばたきが早くなった」

今まで誰にも指摘されなかったが、そんな癖があったのか。自覚などなかったが、いずれにせよ私が嘘を吐いていることは事実だった。反論の余地はない。黙りこくる私に、志藤はだいぶ逡巡を見せてから言った。

「この期に及んで嘔吐くことなんてないだろ」

そのどこか苦しい表情を見た私は、志藤があの日のことを話題にしようとしなかった理由が分かった気がした。きっと彼は、自分のせいで私がどんな思いをしたのか、それを知るのが怖かったのだろう。私が彼を恨んでいるかどうかは関係ない。私の受けた傷が、そのまま彼に罪となつてのしかかるのだから。

今だって、後悔してないという私の嘘に騙されたフリをすれば、彼はこれ以上罪悪感を抱えずに済むはずだった。……それでも、こうして苦渋に満ちた表情を浮かべながらも私の嘘を指摘したのは、彼が真実と向き合おうとしているからだろう。

私だけが、嘘で誤魔化そうとしている。七年前のあの日まで水下への気持ちに気付かぬフリをし続けたように、あの日の傷と涙を見

ないようにしてきたのだ。

そうして後悔をしたというのに。

「……そうね。本当、その通りだわ」

志藤の言葉に自嘲気味に同意した後、私は七年間見て見ぬふりをし続けた本心をさらけ出すことにした。

「でも、志藤のせいじゃないっていうのは本当よ。あの日の出来事を招いたのは私自身の責任。自分の気持ちに嘘を吐き続けたツケを払っただけなんだから。……ただ、あの日嘘を吐いたせいで、自分の気持ちを偽り続けなきゃならなかったのが、少しだけ心残りかな……」

告白は、自分で思っていたよりも落ち着いて簡潔に終わった。気付かないふりをしてきたつもりでも、七年もの間今と同じ言葉を繰り返して、もうとつくに後悔し疲れていたのかもしれない。だからといって、後悔が消えてくれるわけではないのだろうが。

沈黙する私を見て告白が終わったことを察したらしい志藤は、不意に質問をしてきた。

「なあ木崎。さっきのまばたきが早くなる癖。誰が教えてくれたと思う？」

答えられない。少し考える時間を与えられても、皆目見当がつかなかった。そんな私の様子を見て、志藤は意味ありげに笑ってから正解を明かした。

「水下だよ」

「嘘」と聞き返すと

「本当」とまたしても素早い切り返し。そしてまた、やっぱり気付いていなかったか、とばかりに志藤は溜息を吐く。

今度ばかりは納得いかず、すかさず私も言葉を返す。

「いつ？いつからあいつそんなこと知ってたの？」

「ずっとずっと昔からだそうだ。十数年も幼馴染をやっているれば、それくらい気付くんだら」

「じゃあ何？あいつ、あの日私が『好きなのは嘘』って言ったのが

嘘だつてわかつてたつてこと？」

「そういうこと」と頷いた後で、志藤は種明かしをするように言った。

「あいつが嫌いな嘘っていうのは、本当のことを嘘だと偽る嘘なんだよ」

あまりにも想定外の話に混乱極まる私の頭では、導き出されるはずの結論がなかなか出てきてくれない。代わりに志藤が、その結論をはっきりと言葉にしてみせた。

「水下はさ、木崎の本当の気持ちに気付いてたんだ」

……ああそうだ。つまりはそういうことだ。

「……なんだ、初めからばれてたんだ」

全てを理解した私はそう呟き、思わず吹き出してしまった。

今の今まで、偽った気持ちの下で泣き続けて道化にでもなったつもりでいた私が、それこそ本物の道化のように滑稽だったからだ。

あの日の去り際の、何か言いたげな水下の表情を思い出す。水下のことだから、私の気持ちに応えられないことを申し訳なく思っていたのだろう。本当にどこまでもお人よしの馬鹿だ。

そんな彼を好きになった。その想いは、確かに届いていたのだ。

「それなら志藤が気に病むことなんて、もう何もないよ。それだけで後悔する必要なんてもうなくなったもの。……それに」

私は改めて、志藤に明るく言葉を掛ける。

あの日、偽りの気持ちで笑う必要なんてなかった。その気持ちの下で涙を流す必要もなかった。七年前の四月一日の道化など、初めから存在しなくてもよかったのだ。……もしその存在に意味があったとすれば、それは、自分の行為に罪を感じながら生きてきた目の前の彼を、罪の意識から救い、笑わせてやるくらいのものである。

「私、今幸せだから」

言いつつお腹のあたりをさする私の左手の薬指を見て、志藤は私の言わんとすることを察しただろう。だが彼は、あえて確認するように私の目をじっくりと見た後で

「嘘、吐いてないみたいだな」

と顔をほころばせた。

「当たり前でしょ」

と、私も笑みを返す。

その笑顔が、悲しみを隠し、誰かを騙そうとするための偽りの面ではないと、今なら自信を持ってそう言える。

letter (前書き)

母の日のお話です。

letter

五月十日、自宅に一通の手紙が届いた。宛先は久遠明日香。差出人も、久遠明日香。それは記憶の片隅に追いやられていた記憶。

「十年後のわたしへ」

ポストから取り出したのが自分で本当に良かった。

「お元気ですか？今の私は、元気ではありません」

知らんわ。いや、知ってるけど。

「単刀直入に聞きます。二つの誓いは守れていますか？もし片方でも守れていないのなら、もう一度十年前の気持ちを思い出して下さい」

誓いなんて意外と可愛いこと言うじゃん、私。

「最近わたしの周りですごく風邪が流行っています。体調にお気を付けて」

そして心配されて手紙は締め括られていた。ごめん、今ちょっと風邪気味。と、そんなことはどうでもいい。今大事なことは一つ。誓いなのだ。

十年前、幼なじみである東郷俊太郎 トウゴウシュンタロウの母が亡くなった。当時シュンタは魂が抜けたような顔をして、突然泣きだすような状態だった。そんなシュンタを見てられなくて、でも何の力にもなれなくて、そんな日々が続くのがただただ悔しくって。そこで書いたのがこの手紙。当時の私にとって縋るような思いで紙に「証拠」を残し、変わることを誓った。一つ、シュンタを笑顔にすること。一つ、母を大切にすること。

この手紙をポストに入れてくれたのは、シュンタだ。一つ目の誓いを達成した時に手紙を渡しておいたので間違いない。…よく忘れずに届けてくれたものだと思うが。問題は二つ目の誓いだ。

「母親を大切にするねえ」

超難題である。本日提出かつ全く手を付けていない課題を仕上げるよりも困難を極める。

私は母が嫌いだ。それは今も昔も変わらない。ただシュンタのお母さんが亡くなられた時、母を失うこととはどのようなことか考え、ぞつとした。

「変わらな、い…？」

当時、放課後の家事を強制されていた私にとって母がいなくなることはむしろ負担が減るだけのことだと思ってしまったのだ。

「じゃあ何で誓いなんてたてたんだっけ」

そう、確かに当時の私はそう思っていたはずだ。シュンタのお母さんが亡くなってしまったからって、それだけで自分の母を大切にしようなんて思う私じゃない。

悩んでいると突如インターホンがなった。

「明日香ー、いる？」

「シュンタ？開いてるから入っていいよー」

そう言うのと玄関の開いた音がして、ちゃんと鍵を閉める音もしてシュンタが私の部屋までやってきた。

「女の子の一人暮らしで鍵を閉めないなんて無用心だよ」

「ここ、一応実家なんだけどね」

「半分一人暮らしみたいなものじゃないか」

「まあ、確かにね」

苦笑いする私に対し呆れたような視線を送るシュンタ。

「で、今回は瑠美さん何日くらい帰ってないの？」

「たまに私が寝てる時間に着替えとか寝に帰ってきてくることもあるけど、かれこれ半年くらい会ってないかなあ」

「そりやまたずいぶん長いこと」

どこをほつつき歩いてるのは知らないが、このまま一生帰って来ないで欲しいと切実に思う。

「そういえば、手紙。何て書いてあったの？」

「読んでないの？」

思い出したようにシュンタが聞いてきたが、私にとってこの質問は意外だった。

「当たり前だろ。他人の手紙を読むわけないだろ」

それはそうだが、ポストに入れず人に届けてもらうよう頼んだ手紙なんて一度は見られて当然だと思っていた。

「シュンタがいい子に育ってくれて、お姉さんは嬉しいなあ」

十年前の苦境を乗り越え、当時から想像出来ないほどにいい子になってくれて本当に嬉しい。

「誰がお姉さんだ。てか、育てられた記憶なんて一切無いわ」

そんなことを言いながらそっぽを向く。

「あらあら、反抗期かしら？」

「うるさい。そんなことより、手紙。見ていいなら勝手に見るぞ」

「どうぞご自由に」

手紙を渡すなり、ものの10秒で読み終えた。

「二つの誓いつて何？」

まあ、当然聞かれるとは思っていた。

「一つ目は秘密。もう一つは、母を大切にする」

「お母さんを？明日香が？」

「ええそうよ。ただ、自分でも何故そんな誓いを立てたのか思い出せなくて」

「十年前ってことは、そっか。でも、人の親が亡くなったからって自分の親を大切にするような人間じゃないしなあ、明日香は」

よくご存知で。

「そもそも、何故誓いなんて立てたの？別に明日香には必要ないものではなかったの？」

「必要だったよ。実際、誓いのおかげですごく頑張れたしね」

ふと、窓の外を見てみる。庭が見えて、鳥が見えて、シュンタの家も見える。そうそう、夏になると二人で花火大会の花火もこの窓から見てたっけ。昔と変わらない風景がそこには広がっていて、昔み

たいにシュンタと二人でお話して。なんだか懐かしい。

「変わりたかったの。無力でダメダメな私から、一生懸命頑張ってなおかつ結果を残せる私に」

十年前のことなんて思い出せないけれど、母を大切に出来る人間とというのがあまりにも当時の私には想像出来なくて、今の自分とかけ離れてるから自分が変わったと自覚できる、言わば変化の象徴的なものだったのかもしれない。

「結局、変われなかったのかな、私」

そう考え出すと、なんだか悔しい。シュンタは元気になってくれたけど、守れている誓いは一つだけだ。つまり、自分で立てた誓いすら守れないような弱い人間になってしまったということだ。

「なんて顔してんだよ、お前」

「……え？」

「いいんだよ、明日香は変わらなくて。馬鹿みたいに明るくて、お節介で、気まぐれ人間だけど。昔から変わらないでいてくれたから、俺は母さんの死から立ち直ることができたんだ」

「でも、シュンタはちゃんと成長してるのに、私は全然……」

「だったら、今からでも遅くないだろ？ 久遠明日香ともあるうものが、何諦めてんだよ？」

にっと、笑顔でそう告げる彼を見て、思わず私は笑い出す。

「な、何笑ってんだよ」

「シュンタのクセに、生意気よ」

変わったシュンタと変わらない私。シュンタが変わって私は嬉しい、私が変わらなくてシュンタは嬉しい。なら、変わらなくてもいいのかな。

その日、シュンタは夕食を食べてから自宅へ帰った。お世辞か本当か知らないけど、いつも美味しい美味しいって言って食べてくれるから作り甲斐がある。シュンタが帰った後、シャワーを浴びて布団に入るとカレンダーの文字が目に入った。

「Mother's Day……」

そういえば、今日は母の日か。

「今からでも遅くない……のかな？」

だったら、昔なんて関係なく、今の自分の思うようにやってみよう。思い立ったが吉日、すぐに私は手紙を書き自宅のポストへと入れた。あの人が帰ってきたらポストを必ず確認するのを私は知っている。いつ読むかわからないけど、むしろ読むかどうかすら分らないけれど、それでも、私は一歩進歩したと信じたい。

久遠瑠美様へ

お元気ですか？風邪の一つでもひいてくれていると嬉しいです。今私はご近所の東郷さん家の息子さんとお付き合っています。俊太郎っていいです。どうせ覚えてないでしょう？瑠美さんが帰ってこないと二人で広いお部屋をゆったり使えるので快適です。もう帰ってこないで欲しいです。

本題に入りますが、今日は母の日と言う事で筆を執りました。十年前の私からの指令だったのですが、反吐が出そうで大変です。それでも瑠美さんに伝えたいことがあります。

私を産んでくれてありがとう。お母さんが私を産んでくれなかったら、私はシュンタとこんな幸せな毎日を送ることが出来ませんでした。きつとお母さんはお父さんのこと嫌いだったから、お父さんの血が混じってる私のことも大嫌いかと思っています。結構です、私もお母さんが大嫌いです。でも、それでも。年に一度くらいだったら私の前へ顔を出して下さい。その日だけはお母さんの分も夕食くらいは作ってあげます。

それでは、体調にはお気をつけないで。

久遠明日香

> i 2 6 7 6 8 — 3 2 4 5 <

l e t t e r (後書き)

オマケに続くかもしれません

梅雨の雨の憂鬱（前書き）

梅雨のお話です

梅雨の雨の憂鬱

「雨、降りそうだな」

六月の上旬。晴れた日が続いたせいか久々の曇天に少し憂鬱な気分になる。こんな日は外に出ず家で大人しく勉強でもしているのが吉だと思い鞆を開くが、お目当ての教科書が見当たらない。

「おまけにこういう日に限って学校に忘れ物するなんて、何やってんだか」

憂鬱な気分はさらに加速する。このまま他の教科の勉強をしても良いのだが、如何せん気が乗らない。こういう時はどうしよう。

「昔だったら、迷わず桜に借りに行くんだけどなあ」

現実味を帯びない独り言をつぶやき、憂鬱を通り越して鬱になりそう。

「逆転の発想だ。外に出れば気分も変わる、本来やる予定だった教科の勉強なら気分も乗る」

だったら、雨が降り出す前に学校へ取りに行ってしまうおう。天気予報では夜から雨が降りだすと言っていた。そして現在時刻は四時ジャスト。まだ行ける。念のため折りたたみ傘を持って行き俺は学校へと向かった。

「天気予報のバカヤロウ……」

学校へ到着し教室で自分の机の引き出しを漁っている最中、外の音が変わったことに気がついた。廊下の開いた窓からは冷たい風も入ってくる。そもそも梅雨のこの時期に雨が突然降ることなんて想定内だったし、傘もちゃんと持ってきているから困ることなど別に何もないのだが、それでもやはり嫌なものは嫌だった。

「昔は雨、好きだったのにな」

雨の日にもいつも泣いている女の子がいた。その子は俺が傘を差し出すと途端に笑顔になりだして。気のないふりをする俺は相合傘しな

がら真っ赤になって。そんな幼い頃の当たり前が遠い存在になったころ、俺は雨の日が好きでは無くなった。もちろん、その頃の思い出は今でもとても大切に思っている。好きな子を純粹に好きであれたこと、好きであることが迷惑にならなかった頃のこと。今はかけ離れすぎて、思い出すだけで涙が出そうだけど。

「あー、憂鬱だ」

何故雨の日はここまで人を憂鬱にさせるのだろうか。

そんなことを考えていると、チャイムが鳴った。それと同時に近くの教室が開く音と、中から出てくる生徒たちの足音と話し声。

「今年ももしかすると花火大会の日に仕事入ってしまうかも」

「そう、か。わかった。じゃあしつかり予定空けておくよ」

この声は、学校の名物委員長と副委員長の声だ。二人がいると言うことは、今日は学級委員会が行われていたのか。

「嫌な予感がする」

こういう日の嫌なカンと言うものは得てして当たるものだ。俺はするりと教室を抜け出し、図書室で少し時間を潰してから帰ることにした。

三十分程度経った頃、俺は下駄箱へ向かった。雨が止んでから帰りがかったのだが、雨足は先程よりも強くなっていてこれ以上待つても悪化する一方だと判断した。靴を履き替え外へ出ようとするが見覚えのある女の子がいた。……本当に、何故こういう日の嫌な予感というのは当たってしまうのだろうか。

「桜」

ちよつと前までは学園の人気者だったのに、高校生になると同時に女優にもなり、現在では国民的人气者へとなった俺の幼馴染、近衛桜。彼女とは昔よく遊んでいたのだが、気づけば遠い存在となっており、今ではすっかり疎遠になってしまっている。学級委員会があったのだから俺が教科書を取りに来た時点で学校にいた事はわかっていただが、わざわざ時間を置いたのに鉢合わせるとは思って

いなかった。

「あつ」

桜が俺に気づいて小さく声をあげた。

「誠君も今帰り？」

「ああ」

桜は昔と変わらず笑顔で話しかけてくる。傘も持たず立ち尽くし困り顔で外を見つめる彼女に対し、俺はわざと素っ気なく返す。正直、あまり関わりたくない。

本人は意識していないように思えるが、桜が過度に男と仲良くしているのが目撃されたらきつと良くない。それも、こんな冴えない男と。桜にとっては幼馴染と仲良くするのは当然のことなのだろうが、周りはきつとそう評価してはくれない。どんなに桜や俺が昔と変わらない関係を望んだところで、それは到底叶うはずのない願いなのだ。お互い成長し、歳が変わり、身体が変わり、容姿が変わり、立場が変わり、進む道が変わり。何もかも変わらねばならぬ。年頃の俺達だからこそ、変わらないことの方が難しいのだ。

「じゃあな」

だから俺はなるべく桜を避けるようにしていた。例え自分の想いを殺してでも。

「ばいばい……」

すれ違いざまに声をかけられ思わず一瞬桜の方へ振り返る。振り返ってしまった。そこには久々に直視した桜の顔と、今まで見たことのない悲しげな表情。俺は何故こんなことをしているのだろう。俺は桜の為を思っただけのような態度をとってきたつもりだった。桜がどう思おうが、結果桜の幸せにつながれば良いと決意していた。なのに。そんな俺の考えをすべて否定するような桜の表情に心が揺らぐ。辛い。つらい。俺はこんな表情を見るためにこんなことをしてきたわけじゃないのに。

「使えよ」

「……え？」

> i 2 6 8 8 5 — 3 2 4 5 <

気づくと、俺は桜に傘を差し出していた。

「だから、使えって。どうせ桜のことだ、傘なくて困ってたんだろ？」

駄目だと思いつつ、昔のような言葉が出てくる。こんな偉そうな言葉遣いじゃ、こんな馴れ馴れしい話し方じゃいけないと思うのに、桜への接し方はこれ以外わからない。

「別に、返さなくていいから」

何が起こっているのかわからないと言わんばかりの桜に傘を押し付け、俺は外へ出る。土砂降りの雨に打たれ髪も服も一瞬でびしょ濡れとなったしまったが、思いの外冷たくて気持ちいい。

「でも、それじゃあ誠君が濡れちゃうんじゃない……」

「もうびしょ濡れ。だから、それは桜が使えって」

俺は走りだす。これ以上一緒にいるのはもう辛い。

「ありがとう！今度ちゃんと返すから。絶対、返すから！」

走り去る俺に桜が叫ぶ。余計なことをしてしまった自分の甘さに呆れながらも「今度」という言葉に期待してしまっている自分もいていろいろ思うことはあるけれど、桜のあんな表情をみないためにこれからどう接するかとか考えたいけれど、とりあえず今はすべてを吹っ切るように俺は帰路を走り続けた。

梅雨の雨の憂鬱（後書き）

オマケに続くかもしれません

花火（前書き）

花火大会の話です

花火

その音を聞いたのは、実に二年ぶりのことだった。

だというのに、もう十数年も前から待ち焦がれていたかのように、いち早く顔を上げてしばしその輝きに見惚れていた。

家の近所で毎年行われる花火大会は全国的にもかなり有名で、各地から多くの人が花火目当てに足を運ぶほどである。当然地元民は毎年花火を拝むことになり、かくいう俺も、そうしてかれこれ十七年あの花火を見て育った口だった。

初めてあの花火を見たのは四歳のときだったと記憶している。あの日はもつと小さい頃から親に抱きかかえられて見ていたかもしれないが、とにかく記憶にあるのは四歳の時に見た花火だった。そしてその時の花火が、今も鮮烈に印象に残っている。

数発の花火が上がっては消えていくのを見届けてから、俺は歩き出す。残念ながら今はいつまでも花火に見惚れている場合ではない。視線を周囲三百六十度にくまなく巡らせながら、空を見上げる人々の間を縫って目当ての人物を探す。

歩き回ること数分。喧騒から離れた小さな公園に、探していた浴衣姿を見つけた。背後では花火が次々と打ち上がる音が聞こえてくる。この公園からは花火がよく見えるものの、やや距離があるために見物客はいない。穴場といえば穴場なのだが、目当ての人物はどういうわけか、花火には背を向けていた。

「泉委員長。ここにおいででしたか。お迎えにありがとうございました」

「……洗くん？有季たちはどうしたの？」

寂しげな後ろ姿におどけて仰々しく声を掛けてみたのだが、これといった反応もなくいつも通りの調子で返されてしまった。

彼女の名前は泉涼子。同学年同クラスの女子生徒である。成績優秀、容姿端麗、スポーツ万能、品行方正と非の打ちどころのない有能さもさることながら、風紀や規律を重んじ生徒会や教師をも差し

置いて運動を断行する実行力から、多くの人間に一目置かれている存在である。学級委員長としての、涼しげな名前を負かしたような氷点下の言動が校内に広く知れ渡っているせいか、とかく厳格で冷めた人間との誤解をされやすく、そのフォーローに努めるのが目下俺の役割であつた。

そんな学級委員長と副委員長としての付き合いはもう一年以上になるが、場を和ませようとしているこの仰々しい第一声に対して反応してくれたことは一度たりともない。意地になって続けてはいるものの、流石に何の反応もなしとなると恥ずかしい。とはいえ、そんな反応にも慣れたもので、こちらに背を向けたままの彼女に近づくながら、いつも通りの口調で答えた。

「先に行つてもらつたよ。妹たちも一緒だ」

花火大会には二人で来たわけではない。クラスの友人や妹たちと一緒に遊びに来ていた。しかしいざ打ち上げ花火が始まるときになつて泉がはぐれてしまい、俺はそんな彼女を探しにここまで来たのである。それもこれも、俺と泉を二人きりにしようという友人たちの企みによるものだった。その理由も大体察しがつくが、迷惑極まりないとは正にこのことである。俺は泉と二人きりになりたいなどと願つた覚えもないし、ましてや友人たちが目論む関係になりたいと望んだりしたこともなかった。泉とてそれは同じだろう。下の名前で呼んでくるのも決して色っぽい事情からではなく、俺の榊原という名字が長くて呼びにくいというただそれだけの理由なのだから。「さあ、俺たちも早く見に行こう」

花火の鳴り続ける背後を気にしつつ、泉を促す。まだ一万発以上残っているだろうが、何せ年に一度、今日この日しか見られないのである。一発とて見逃すのは惜しく感じる。

泉はようやくこちらに振り向いたかと思うと、俺からやや上空へと一瞥をくれた後でキツパリと言つた。

「見に行つてきていいよ」

予想外の返事に、俺はしばし言葉を失う。訝しげに、花火に照らさ

れた泉の顔を窺うと、その表情はどこか憂いを帯びているようにも見えた。そんな彼女らしくない表情に、一層困惑した俺は「いや、だから。泉は見に行かないのか？」と間抜けな質問をしてしまう。いつもならここで「わかりきったことは聞かないの」と委員長よろしく嗜めてくるところだが、今日の泉はそうしない。代わりに

「私はいいよ。一人でここにいる」

と言った後で「これ、やってるから」と手に下げたビニール袋から花火セットを取り出してみせた。

「でもそれは皆でやるやつだろ」

「他の皆は自分たちの花火を用意してたみたいだし。問題はないでしょ」

どうやら泉も友人たちの企みには気付いていたらしい。初めからこの花火セットは俺と泉が二人でやるために用意されたものだった。

それ以上の反論は続かずますます閉口せざるをえない俺に、泉は困ったように言葉をかける。

「楽しみにしてたんでしょ、打ち上げ花火。去年は私に付き合わされて見られなかったから」

泉の言う通りだった。

年に一度にしか見られないあの花火は、俺にとって特別な意味を持っていた。それが、去年は泉の仕事に付き合わされたせいで、花火大会に来ることができなかったのだ。だからこそ今年は例年以上に心待ちにしていた。泉を説得しながらも、さっきから鳴りやまない背後の打ち上げ花火が気になって仕方がない、というのが正直なところだった。しかし、はいそうですかと泉を置いていけるはずもなく俺は

「だったら、打ち上げ花火を見た後でやればいいだろう」

と論理的に反論を試みていた。普段ならそういった弁舌は泉の専売特許であり、いくら俺が真似をしてみたところで理路整然とした応酬が待っていること請け合いだった。ところがそれに対する泉の反論は、ごくごく個人的で、感傷的なものだった。

「私、ああいう花火はあんまり好きじゃないし、線香花火の方が好きなんだ」

こちらに背を向けてしんみりと呟く泉の声は、委員長としての毅然とした声でも、常の惔然とした声でもない。

それは泉涼子という、ただの女の子の声。

そう感じた途端に、優秀な委員長の背中はいつか見たときよりもか弱げに見えていた。

遠くで、もう何度目になるかわからない大きな音が連発する。

突然、空に咲く大輪に目をやる泉。それにつられて、俺は空を見上げていた。

「あの花火はさ。確かにたくさんの人を引いて離さない、特別なものだけど、輝けるのは夏の夜、皆の期待に応えるときだけでしょ。そうでもなければ季節外れと煙たがられるか、時間を考えると疎んじられる……。特別なだけに、多くの人に望まれないと輝けないなんて窮屈そうだと思わない？」

「……でも、線香花火みたいに地味で目立たないよりはいいじゃないか」

唐突に始まった泉の口上に、俺は思いのほか強い語気で口を挟んでいた。彼女の言葉が単純に花火のことだけを言っているのではなく、暗に人の話をしているのだと感じたからだろ。同じように感じたことが俺にもあった。

あの打ち上げ花火を初めて見た四歳の夏は、丁度妹が生まれて一年が経ったときだった。両親は目にかけて妹を可愛がっていた。少なくとも、俺の目にはそう映った。当時の俺はそれを、妹が特別な存在であり、俺が平凡な存在だからなのだと納得した。

その時に見たからなのか、人の目を引いて離さないあの打ち上げ花火は、特別な存在の象徴として俺の目に映った。その輝きに憧れ、地味で目立たない自分のような線香花火を嫌いになった。

両親の猫可愛がりの原因はどちらか一方だったかもしれないし、或いはどちらでもなかったかもしれない。だが十数年経った結果だ

けを見れば、妹はそんな両親の愛情に応えるかのように立派で優秀で、特別な人間に育ち、俺は地味で目立たない平凡な人間に育っていた。そして俺は、そんな自分の平凡性を甘んじて受け入れ、今まで生きてきた。

高校に入って、線香花火のような自分を変えたいと半端に学級委員なんてものを始めたあの日に会ったのが、泉涼子という女子生徒だった。目を離さずにはいられない輝きを放つ、存在感の塊。あの日見た花火に似ていると思った。四歳の時に見た、特別の象徴。今も褪せない鮮烈な輝き。その輝きに、憧れた。

強く否定してしまったのはきつと、他ならぬ彼女がああ輝きを否定することを許せなかったからなのかもしれない。

泉も若干驚いたように振り向いたが「そうかもね」とすぐに首肯した。その表情はどこか穏やかで、優しく間違いを諭す教師のそれを思わせた。

泉は手に下げていたビニール袋から花火セットとチャッカマンを取り出す。水も用意していないのにと制しようかと思ったが、泉が花火セットから出したのは線香花火の束だけだった。それなら後で水を用意するのでも構わないかと思い直し、黙って見届けることにする。

泉はその場にしゃがみ込むと、一本の線香花火に火をつけた。弱々しく燃え始めるそれは、まさしく自分を見ているようで惨めだった。泉はその弱々しい輝きから目を離さずに口を開く。

「でも線香花火は、こんなにも近くで、望んだ人ひとりひとりのためだけに輝いてくれる。少なくとも私は、とても安心する」

その声は聞いたこともないくらいに穏やかで、しかし断固とした確信に満ちていた。

「確かに地味で目立たない輝きかもしれないけど、本当は一生懸命で力強いんだよ」

泉は矢継ぎ早に言葉を重ねる。そうであるようにと願い、そうであるのだと信じるように。

その言葉の一つ一つが、俺の心をほぐしてくれるのを感じていた。気が付けば線香花火は、有らん限りの力で燃え上がっている。俺もその輝きに不思議と目を奪われていた。結局、目を離すことなく火が落ちるのを見届ける。既に燃え落ちた火を名残惜しそうに見つめながら泉は言った。

「私はそれを知ってるから、そんな線香花火の方が好きなの」
そして、微笑みながら俺を仰ぎ見た。

> i 3 0 5 7 3 — 3 2 4 5 <

遠くでは、まだ大きな音が続いている。

その明かりに照らされたその顔は、やはりあの日見た花火に似て、美しかった。目を離さずにはいられない、そんな輝き。なのに、俺は思わず顔を背けていた。

その笑顔が、線香花火のようでもいいのだと、認めてくれた。それでも今はまだその言葉を、胸を張って受け止められそうになかったから。

いつか来るのだろうか。線香花火のような自分を認められる日が、それを教えてくれたこの笑顔を真っ直ぐに見返せる日が。

泉が、新しい線香花火に火をつける。

そのいつかを夢想した俺は、小さく咲き誇る線香花火の輝きを見つめていた。

花火（後書き）

オマケに続くかもしれません

夏と嵐と誕生日（前書き）

台風のお話ではない気がしますですが台風のお話です。
（横読み推奨）

夏と嵐と誕生日

誕生日前日、俺は窓の外を鬱屈しながら眺めていた。台風直撃、雨も風も大盤振る舞いである。正直、そんないつもと違う外の光景が楽しくもあつた。しかし外の荒れ模様を見ているとやっぱりツイていない気もしてきて。そんな中、部屋にあつた携帯電話の鳴る音が聞こえた。画面を開くと見慣れた後輩女子の名前。俺にとって、日常と非日常の象徴。バカでアホでトラブルメーカーで、俺の日常をしつちやかめつちかにする人間。なのに気付けばそれが俺にとつての日常になっていて。しかも驚くことに、いつの間にか俺の中でこいつは「ただの後輩」以上の存在になっていて。

メールの内容を見ると、いつも通りの普通な内容。ただの世間話。俺はソファーに寝っ転がりながらすぐ返信することにした。

> i 3 5 1 9 0 — 3 2 4 5 <

新着メール

2009 / 8 / 12 22 : 03

From 池田瑞希

Subject : 無題

台風、スゴいですね！

私、意外とこーゆーの弱いんですよー（苦笑）

智先輩ん家の方も雨とか酷いですか？

- - - E N D - - -

返信

2009/ 8 / 12 22:11

To 池田瑞希

Subject: RE:

こんばんは。こっちもかなり酷いね。
でもさ、嵐とか台風とか来るとワクワクして来ない？

- - - END - - -

新着メール

2009/ 8 12 / 22:18

From 池田瑞希

Subject: RE2:

あー、いますよね。自然災害でワクワクする人……。

しかし、今年の夏はほんと天気が芳しくくないですね。おかげで先輩と花火大会も行けなかったですしっ（涙）

ところで智先輩、明日誕生日じゃないですか？何かしてほしいこととか欲しいものとかありませんか？この力ワゆい後輩が何でも叶えて遣わしますぞー

- - - END - - -

返信

2009/ 8 / 12 22:37

To 池田瑞希

S u b j e c t : R E 3 :

哀れそうなコメントをするな!!

まあ、確かにあれは申し訳なかったと思うけど、仕方ないだろ！延期になんてなると思わなかったし、延期した日は神崎家総出で妹の大会の応援に行つてた（連行された）んだから!!……まあ、おわびつてわけじゃないけど、今度、どっか連れてつてやるから。誕生日？平和が欲しい。

- - - E N D - - -

新着メール

2 0 0 9 / 8 / 1 2 2 3 : 4 8

F r o m 池田瑞希

S u b j e c t : R E 4 :

すみません、お風呂入ってたッス。

へえ、1コ下の後輩だけじゃ飽き足らず、3つ下の妹さんまでもその毒牙にかけたという事ですな。先輩がそんな人だなんて知らなかったです。今まで騙されてたです！あ、急にデラックスストロベリーアンドチョコレートパフェが食べたかったです。

平和……ですか。先輩にとって平和ってなんですか？嵐が去つて、お天気になれば平和ですか？みんなと一緒に遊んでいられる日々が続けば平和ですか？それとも、戦争がなくなれば平和ですか？

私は。私には。平和が欲しいって言われても、難しいです。

- - - E N D - - -

新規メール作成

To 池田瑞希

Subject: RE5:

別にそんな報告しなくていいよ!!

はいはい、今度何かおごってやるよ。500円以内ならな。

……月並みなセリフかもしれないけどさ、平和なんて簡単なものだよ。少なくとも、俺が求めてる平和はね。だって、お

新着メール

2009/ 8/13 00:00

From 池田瑞希

Subject: RE4:

先輩お誕生日、おめでとーッス!!

夢の18歳ッスねアドアルティッスね(笑)

……私は、私流で行くんで、先輩の期待に添えるかわからないですけど

頑張るので……でも、平和になれなかったら、ごめんなさい。

何はともあれ、おめでとーッございます!

- - - - -
END - - - - -

返信

2009 / 8 / 13 00:06

To 池田瑞希

Subject: RE5:

明日……いや、今日か。11時にいつものカフェで待ち合わせ。そこから1日俺に付き合ってくれれば、それが俺への誕生日プレゼント。俺の平和についてみっちり語ってやるから、覚悟しとけよ？
それじゃあ、おやすみ。メール、ありがと。

-----END-----

2009 / 8 / 13 00:06

From 神崎智

Subject: エピローグ

携帯電話を閉じ、部屋の電気を消し、ベッドへ横たわる。普段明るく元気な後輩は、珍しく自分の弱い部分を露呈させた。俺はいつも無愛想だから、きっと俺のことになると自信が持てなくなってしまうのだろう。本当はそういうところ治したいのだけど、そういうのって不思議なことに今更治せないと思ってしまふもんだよね。まあ、何はともあれ、明日は多少なりとも恥ずかしい事を言う羽目になりそうだ。きつと後輩はそれをニヤニヤしながら聞いて「先輩、可愛いとありますね」とか言うんだろうなあ。……そう思ったら急に明日のこと取り消したくなってきた。でもまあ、そういう日々をずっと一緒に過ごしてきたら俺の「平和」わかってもらえるかな？さて、もう寝るとするか。目覚ましもちゃんとセットしてつと。それでは、瑞希と過ごす平和な時間のために、おやすみなさい。

-----END-----

夏と嵐と誕生日（後書き）

オマケに続くかもしれません。

胡蝶の夢（前書き）

月見と文化祭の話です。

胡蝶の夢

夏休みが終わり、始業式、休み明けのテストと順調に二学期の始まりを迎えた学生たちの関心は、もっぱら文化祭の準備へと向けられていった。

今週末に文化祭を控えますます準備が本格化していくなか、僕のクラスはというと、既にその準備をほとんど終えてしまっていた。それというのもひとえに優秀な学級委員長の功勞であり、今も多くのクラスは下校時刻ギリギリまで教室に残って準備に勤しんでいる。その様子を向かいの校舎の屋上から眺めるのが、僕、井上達己のここ数日の日課になっていた。

見渡せるのは何も無骨な校舎だけには止まらない。学校自体が高所に立地していることから、眼下にはジオラマのように僕の住む街を見下ろせた。点々としている灯りは、さながら夜空の星を思わせる。

視線を上げれば本物の星も、田舎の夜空ほどではないだろうが、見ることができた。

学校からこんな上等の景色が拝めることを多くの生徒が知らないのは、非常に残念なことだと思う。

夏休みに生徒の飛び降りなんてことがあったものだから、きっと多くの生徒は立ち入り禁止だと勝手に思い込んでいるのだろう。少なくとも、誰かに立ち入り禁止だと言われたわけではないのにも関わらず、である。

かといって、決して誰かが立ち入っていいと言ったわけでもないのだが、あくまで僕はここが立ち入ってもいい場所なのだと思います。むことにしていた。

幼かった頃は、確かでないことは思い込んだものが真実になると信じていた。それさえも独りよがりの思い込みでしかなかったのだと、今はよく心得ている。

それでも僕は、思い込むことをやめようとしなかった。

もしもたった一人でも、同じように思い込んでくれる人がいてくれたときに『独りよがりではない』と、互いに安心することができると思ったから。

例えばそう。今この瞬間、屋上に現れた一人の女子生徒が、臆することなく僕へと向かってきたように。

その堂々たる足取り。きっと彼女もまた、僕と同じように屋上は立ち入り禁止ではないのだと思い込んでいることだろう。そんな彼女を見て、僕は自身の思い込みをより一層強くするのだった。

「ここで何してるの？」

近づいてきた彼女は開口一番にそう言った。

風にさらわれる長い髪からは切れ長の目が見え隠れする。その鋭利さに反して瞳は虚ろで、口調はどこか投げやりだった。僕への質問も何となく口からこぼれおちた程度で、答に興味などないのかもしれない。

そんな質問に大真面目に答えるのも馬鹿らしく感じた僕は

「月見だよ」

と、適当な返答をすることにした。

視線を空へとやる。つられて月を見つめる彼女の目つきは、とてもじゃないが風情を感じているようには見えなかった。改めて月をまじまじ見ると、なるほど確かに特筆するほど綺麗ではないかと思う。彼女は特段感想を述べることはなく、代わりに

「月見か。それじゃあなんだか申し訳ないなあ」

と、一言詫びた。ぶっきらぼうな口調は相変わらずだが、それでも少なからず誠意が感じられた。その謝罪の意図を測りかね「どうして？」と聞き返すと、彼女は事も無げに

「私、今から飛び降りようと思ってたから」

と答えるのだった。

彼女の口調がその内容に似つかわしくない、軽薄なものであったせいだろう。僕にはそれが冗談を言っているように聞こえた。

だが、月から僕へと流れるように移された彼女の目を見て、僕は理解する。

ぼんやりとした、しかし確かな決意に満ちた瞳。彼女は決して冗談を言っているのではないと。

しばし言葉を失う僕に

「でもまあ、今日はやめておくよ。まさかお月見している人がいるなんて思わなかったし」

と、彼女はあからさまに馬鹿にしたような調子で言った。そして軽やかに踵を返そうとする。

その物言いに、いささか腹が立った僕は

「月見ってというのは冗談だから、邪魔になんかならない、……けど」などと挑戦的な言葉を投げつけていた。しまったと思って語尾を濁すも時すでに遅し。彼女はすかさず

「じゃあ飛んでもいい？」

と意地悪く問うてくる。考えるまでもなく、答は否である。

「いや、そういうわけじゃないけど……」

「……どっちなの」

だのにそれがはつきりと口に出せない。僕の悪い癖だった。

不確かなことは不確かなままにしておきたい。そんな幼少期の考えが原因だと思う。はつきりさせてしまえば、思い込むこともできなくなってしまうから。

彼女が答を促すように僕を見据えている。

ことここにきて気付く。先程までどこか虚ろだったはずの彼女の瞳が今、隠しもしない苛立ちに満ちていることに。その感情を視線諸共受け止めることで、初めて彼女とちゃんと目が合ったと感じた。そんな実感に浸るのも束の間。元々が切れ長の彼女の目である。

苛立たしげに睨まれるとそれはもうかなりの威圧感だった。

その眼力に気圧されてしまった僕は結局

「……困ります」

などという、ピントのずれた答で逃げの一手を打つのだった。洩々

ながらも納得のいったらしい彼女は

「そういうことなら、日を改めることにする」

と若干表情を和らげて、今度こそ屋上を後にしようとした。とても飛び降りる話をしているとは思えないその気楽さに、つつい素朴な疑問が口をついて出る。

「飛び降りるのならここからじゃなくてもできるんじゃない……」

「……止めたいのか止めたくないのかどっちなの」

「ああ、いや。そういうつもりで言ったわけではないんだけど」

またも苛立つ彼女の声色に、反射的に誤魔化すような言葉が口をついて出る。僕のはつきりしない物言いを糾弾する彼女の視線に耐えきれず、慌てて話を変えることにした。

「君、蝶野藤佳だろ？」

「私を知ってるの？」

これには彼女も驚いたようで、表情を一転して聞き返してきた。

「よく知ってるよ。前にもここから飛び降りたろ」

夏休みにこの屋上から飛び降りた生徒。それが彼女、蝶野藤佳だった。その一件もあって、彼女は校内でもそれなりに有名である。

しかし彼女はその事実を

「そうらしいね」

と他人事のように認めるのだった。

「らしい？」

聞き返すと、彼女はややうんざりした様子。

「自分では覚えてないから。気が付いたら病院のベッドだった」

恐らく、目が覚めて周りから事情を聞かれるにつけ、同じような説明を繰り返したのだろう。何度聞かれても答が一緒なうえに、自分でさえ明確な答を持っているわけではないのだから、辟易するのも頷けた。

「やっぱり記憶喪失？」

蝶野藤佳の飛び降り直後、彼女の名前が校内に知れ渡ると共に、彼女に関する様々な噂が校内に広まった。その噂は実に種々雑多で、

紛れもない真実もあれば根拠のない虚実もあったりしたが、中でも蝶野藤佳が記憶喪失になったという噂は信憑性が高いものであるとされていた。

僕の問いかけに、彼女は「一応、そういうことにはなってるけどね」と暗に否定を含んだ一言の後で説明してくれた。

「私は自分の名前も覚えてたし、どんな人間かもよく知ってるつもりだった。……ただ、その記憶が周りと噛み合わなかっただけなの」

「なるほど。確かに、僕の知っている蝶野藤佳と君はまるで別人みたいだ」

「私は大人しくてか弱い女の子だった？」

僕は無言で首肯する。少なくとも僕が知っている蝶野藤佳は彼女の言う通りの人物だった。彼女は「やっぱりそうか」と、落胆とも諦観ともつかぬ吐息交じりの声で呟いた後、独白を始めた。

「でもさ。私はそんな自分知らないわけよ。私は、どちらかといえば荒っぽくて可愛げのない女の子で、そうやって生きてきたつもりだから。それがある日突然『あなたは、大人しくてか弱い女の子だった』って言われても実感なんて湧かないっての」

彼女はそこまで言って口を閉ざす。その切実な台詞とは裏腹に、他人事のような話しぶり。気付けば、彼女の瞳は虚ろなそれへと戻っていた。

既に苛立った彼女の目を見た今となっては、そのぼんやりとした瞳は不可解な物として僕の目に映った。一体何が彼女にそうさせているのか。僕は彼女の独白に何を言うでもなく、そんなことに考えを巡らせていた。彼女もまた、物言わず空を眺めていたが、不意に「……まるで蝶になった夢でも見てるみたいだ」と呟いた。

咄嗟のことでのその言葉を理解するには至らず「夢？」と聞き返す。彼女は頷いてから口火を切った。

「『胡蝶の夢』って知ってるでしょ」

胡蝶の夢。確か中国の故事だったと思う。

ある男が、蝶になって空を舞う夢を見る。しかし目を覚ました男は、自分が蝶になる夢を見ていたのではなく、蝶が自分になる夢を見ているのではないかと疑う話である。そして彼女はその故事に、今の自分の境遇を重ねているのだ。

「あの話は、どちらが本当の自分かは些事で、蝶も人間もどちらも己には変わりないからどちらも肯定して生きなさいって話だけど、実際はそんな簡単じゃないわ。自分では人間のつもりなのに『あなたは蝶なんですよ』って言われて、そうですかって受け入れられると思う?」

確かに、彼女の言う通りだ。自分が人間だと思い込んでいる以上人間としての自分を知らない世界も、蝶としての自分も受け入れられるはずはない。受け入れられるとしたら……。

「結局のところ、人が蝶か、どちらかは所詮夢だってはつきり決まてないと、とても受け入れられやしない」

「それで、今は夢を見ていると?」

「そう。大人しくてか弱い蝶野藤佳の夢」

彼女の口上を聞き終え、僕は一つ合点がいく。彼女の瞳が虚ろなもの、ぶっくらぼうな口ぶりも、夢を見ていると彼女が思い込んでいたからだっただろう。

見るもの、聞くこと話すこと、全ては所詮夢だと割り切っていた。そうして文字通り夢見心地に、ぼんやりとしていれば、自分のことを知らない世界に傷つけられる必要なんてなくなるから。

だがそれでも、心が磨り減ることは避けられなかったのだろう。

彼女はその本心をさらけ出した。

「はつきり言っただけ最悪よ。自分は人間だと思ってるのに、『あなたは蝶だ』って言われるような最悪の夢。こんな最悪な夢からはささと覚めちゃった方がいいに決まってる」

「だからここから飛び降りるっていうのか」

「そういうこと。大人しくてか弱い私が飛び降りたっていうここか

ら飛び降りたら、目が覚めると思うんだ」

言いつつ、彼女は空へと視線を投げた。目では見えないどこかを見ようとしているような目つき。

その様は、今から飛び降りるというより、飛び立っていくかのよう見えた。或いは彼女自身が、その目に見据える見えないどこかへと飛び立っていけると強く信じているから、そんな風に見えたのかもしれない。そのどこかとは、恐らく元の自分が生きていたはずの世界のことだろう。

信じると言えば聞こえはいいが、それは単なる独りよがりの思いこみだ。僕が屋上は立ち入り禁止ではないと思いついでいるのとは大差ない。他でもない彼女が、それを一番よくわかつているのだろう。彼女の瞳に僅かに宿る不安の光が、それを如実に表していた。

それでも彼女が飛ぼうとするのは、目が覚めなくても、悪い夢が終わりさえすればいいと思っているからなのだろう。例えその結果、死ぬことになったとしても。

「……夢なら、まだわからないんじゃないかな」

不意に、僕はそう口に出していた。驚いた彼女は空に向けていた視線を僕へと戻す。

僕は、彼女が夢に例えて話をしたときから、あることを思い出していた。

「昔さ、僕も夢を見たんだ。思い出すだけでも恐ろしい、最悪の夢」それはまだ幼かった頃に見た夢。

「でもその夢は、最後の最後で最高の夢に変わったんだ。今でも忘れられないくらいのとびつきり最高の夢に」

「それが何？」

唐突に語り始めた僕に、その意図を測りかねた様子の彼女は怪訝そうな目を向けてくる。諦念したその目は素っ気なく、けれども答を求めてやまないよう期待が貌をのぞかせていた。その期待に応えるべく、僕は胸を反らせて、大仰に、自信気に答えた。

「君が今悪い夢を見ているっていうなら、それが本当に悪い夢かど

うかはまだわからない。ひょっとしたら、今から良い夢に変わることでだってあるかもしれないってことさ」

彼女は一瞬息を呑んでから、すぐに溜めた息を吐きつつ

「……そんなこと、あるわけないよ」

と否定の言葉を紡いだ。

確かに、僕の話は夢の出来事で、彼女の場合は現実に行き来していることである。結局のところ、今の話は僕の独りよがりの思いこみではない。

すでに彼女の瞳には僅かに灯されていた期待の色さえも消えてしまっている。だが、彼女の否定の言葉には力強さがいまいち欠けていた。そうならばどんなにいいかと、心の奥底に最後の淡い期待を抱いているのだ。

ならば彼女自身が、悪い夢のような人生がこれから楽しくなるかもしれないと思い込んでくれるだけでいい。さすればそれがきつと彼女の中での真実になるだろう。

もし彼女一人で思い込むのが心もとないのならば、僕もまた同じように思い込もう。屋上に現れた彼女を見て、この場所が立ち入り禁止ではないのだと僕が少しでも強く思い込むことができたように決して独りよがりの思い込みではないと、彼女がより強く思い込めるように。

「そう言わずにさ、僕がここで月見している間くらいは、そうなるかもって思ってた我慢してよ」

「月見は冗談じゃなかったの」

「……まったく彼女の言う通りである。実に格好のつかない提案だった。」

「……今日は冗談で、明日からは本当に月見をするつもりだがこの際、冗談だろうと嘘だろうと体裁はさておくことにする。

要は彼女がここに飛び降りに来られないようにすればいいのだから。

「……なら、一体いつまでお月見してるつもりなの」

その場しのぎの僕の提案に、彼女はあっさりと応じてそう訊ねて

きた。どうやら僕がなりふり構わなくなっているのを見て、そうするるのが最善だと悟ったらしい。思ってもみなかった反応に答の用意などなく、僕がかろうじて返すことができたのは

「……特に決めてはいないんだけど」

そんな誤魔化しの言葉だった。これには流石に彼女も機嫌を損ね、見るからに不服そうに僕を睨みつけて言う。

「何それ。意味わかんない。ムカツク」

暴言に加えて、再び苛立ちを孕んだ彼女の眼力に気圧された僕は、慌てふためき、その結果実に考えなしの発言をしてしまっていた。

「じゃ、じゃあ、文化祭までにしておこうかな。何なら、後夜祭のときにでも飛び降りて文化祭のフィナーレを飾るとか？」

「……本当、止めたいのか止めたくないのかわからないな」

我ながら同意見である。ただここで再度弁解をすれば、ますます彼女の機嫌を損ねてしまうことは火を見るよりも明らかだった。誠に不本意ではあるものの僕は沈黙を選ぶことにする。彼女は彼女で呆れを隠しめせずに溜息を吐いていた。結局、どっちに転んでも彼女の機嫌を損ねる羽目になったようだ。だがその後で

「でも、文化祭のフィナーレか……」

と呟きながら、彼女は向かいの校舎を俯瞰する。今も校舎に残って熱心に作業をする生徒たちの活気を見れば、当日の盛り上がりは容易に想像がつくというもの。そして最終日のキャンプファイヤーでそれが最高潮を迎えるであろうことも、今からわかりきったことだった。だが、その興奮冷めやらぬ内に飛び降りる心地など、どこの誰にも想像などつくまい。何よりそのことが彼女の心を惹いたのだろう。僕の口から出たいい加減な提案を彼女は

「それ、いいね」

と満足そうに笑って採用するのだった。

やがて迎える終わりの時に想いを馳せ、恋焦がれる、あまりに歪んだあり方の笑み。

「それならちよっとだけ、この夢も楽しめる気がしてきた」

だがそれは、彼女が屋上にきてから初めて見せた、本当の笑顔だった。

胡蝶の夢（後書き）

オマケに続くかもしれません

ハロウィン（前書き）

ハロウィンの話です。

ハロウィン

「トリックオアトリート」

十月も残すところ一日。土曜授業の朝のせい、まだ眠たげな空気がたちこめていたホームルームの後、私は前の席の男子に向かって声を掛けた。こうして何かしら話しかけるのは毎朝のことで、男子は待っていたとばかりに振り返る。だが早いのは振り返るだけで、どう返したものと彼は毎度思案に暮れる。別に面白いことを言えとは言っていないのだが。

今朝は特に苦心しているらしく、表情も困惑気味である。もっと普通に話しかければよかったかと私が反省を始める頃になってようやく

「オー……。アイキャントスピークイングリッシュ。インジャパニーズプリーズ」

と、やけにわざとらしい棒読みで彼はそう答えた。所々に生粋の発音の良さが滲み出てしまっている。

あれだけ悩んでいた割にしようもない切り返しがきたものだと、内心で私は鼻白むものの、したり顔でこちらの反応を窺っている男子を見たら、そう無下にすることもできなかった。私はややふんぞり返って

「奢れ」

とお望み通り日本語で率直に言い放つことにする。私が興じてきたことに彼は一瞬表情を輝かせたかと思うと、腕を組み、足を組み、私以上にふんぞり返って

「頭が高い！」

とのたまうのだった。

しばし、言葉を失い、私を見下ろしきれない淡褐色の瞳と見つめ合う。

しかして

「……そっちの『驕れ』じゃない。というか……」

と呆れつつ訂正を入れた後で、目の前でふんぞり返る金髪の男子に向かつて訊ねた。

「どこでそんな言葉覚えてきたのよ。……ハワード」

私の問いに目を丸める彼の名はハワード。ホイトマン。今年四月からのアメリカ人留学生である。

絵に描いたような傲岸不遜な態度を崩したハワードはあっけらかんと答えた。

「この前テレビで見た」

「ドラマか何か？」

「そう。日本語会話の勉強になるからって先生が」

四月の初め、私はほとんど日本語を喋ることができなかったハワードの世話役に抜擢された。聞けば、英語の成績が優秀だったから、との理由だけで白羽の矢が立ったというのだから驚きである。

いくら優秀とはいえ、高校二年生の英語力などたかが知れたもので、当初会話での意思疎通にはかなりの労苦を要した。

幸いしたのはハワードが日本語の読み書きを少しだけできたことである。

私は日本語の勉強になるようにと、趣味で集めていた少女漫画を彼に貸し与えた。

「読み書きは大分できるようになったもんね」

「少女漫画すごく面白かった。メールもよくしてくれた」

ハワードも純粹に少女漫画を気に入ったようで、その感想をメールでやり取りする内に日本語の文章に少しずつ慣れていった。

それからは筆談なども交えてハワードと会話をするようにし、今ではこうして、無理なく会話できるまでになったのである。

「全部トミーのおかげ」

人懐っこい笑みを浮かべて、ハワードは言う。中々口にしにくいことを言えるのは外国人ならではだろう。

「友達だもん。当然でしょ」

自然に笑い返す。そんな彼と話しているうちに、私も以前に比べて恥ずかしげもなくこんなことを言えるようになっていた。その分、上手に本心を隠せるようになってしまっているようで、何だか後ろめたさも残った。

今でこそ、ハワードとの付き合いは楽しくて仕方がないかけがえのないものであるが、当初は面倒を押しつけられたものだというのが本音だった。それでも引き受けたのは下心があったからだ。

物心ついた頃から少女漫画が大好きだった私は、いつしか物語のような甘酸っぱい恋に憧れるようになった。そんな心とは裏腹に身体はすすくと育っていき、中学が終わる頃に私の背丈は男子と肩が並ぶほどになっていた。

私の身体は、少女漫画の主役には似ても似つかなかった。彼女たちは皆、恋するつぶらな瞳で意中の相手を見上げていたからだ。

男子を見下ろす私に、彼女たちのような恋は望めない。そんな自覚と共に、漫画は所詮漫画と割り切っていた私にとって、アメリカからの留学生という言葉は大変に魅力を含んでいた。

漫画のような見上げる恋が始まるかもしれないと、心のどこかで期待をして、私はその留学生とやらの世話を引き受けたのだった。

そんな私の期待はハワードと初めて対面した際に、あっさりと破り捨てられることになる。彼の顔は私の顔と同じ高さにあり、文字通り対面することになったからだ。

そのうえ意思の疎通すらままならなかったのだから、ロマンもへったくれもあつたものではない。恋の甘酸っぱさではなく、現実のほろ苦さが身に沁みた。

とはいえ、今は彼のいるこの日常に満足している。

彼との意思疎通のために励んだ英会話のおかげで、ただでさえ優秀だった英語の成績はますます伸びることになったし、アメリカのことをハワードから聞くことで見聞を広めることもできた。

「ところで、ハワード」

ただ、一つだけ不満があるとすれば

「いつも言ってるけどね。できればトミーじゃなくて、ミコトって呼んでほしいんだけど」

それは彼の、私に対する呼び方だった。

自己紹介の時にもお願いをしたのだが、発音が難しかったらしく、仕方なく呼びやすそうなトミーで妥協することにした。しかし、日本語をそこそこ話せるようになった今、トミーという呼び方を続けてほしくはない。何より、私はミコトと呼んでもらいたいのだ。

「なんで？」

私の要望に、ハワードは本気で首を傾げている。そんな彼に、私は説明を試みた。

「なんで、って……。皆もそう呼んでるでしょ」

「うん」

素直に頷くハワード。わかってくれたかと安堵するのも束の間

「でも、それもおかしいよね」

と、今度は腕組みして考え込む。「それ」とは皆が私をミコトと呼ぶことだろう。おかしいことなど何一つありはしない。

「何がおかしいの？」

うんうん唸るハワードに私が訊ねると、彼は解説を見ても理解できない問題に直面したような困窮極まる面持ちで言っのだった。

「だって、トミーの名前はトミコなのに」

「十美子って言うな！」

そんな彼に、私は脊髓反射的に抗議の声を上げていた。

そう。私の名前は十美子であり、決してミコトではない。ミコトというのはトミコのアナグラムで、小学校以来好んで使っているニッケネームだった。

というのも、十月生まれの美しい子、という自信過剰にも程がある由来の名で呼ばれるのは躊躇われたし、トミコという名前はどうも年寄りくさい印象が拭えず好きになれなかったのだ。

何よりミコトの方が少女漫画の主役らしい名前である。

そう思った私は中学から徹底してこの渾名を普及させてきた。そ

れは、物語の中の少女になりきれない身長の私にとっての、せめてもの抵抗だったのだ。

「花村、ちよつといいか」

「はい！」

どら声を上げたまま固まっていた私は、背後からの突然な呼びかけに飛びあがって返事をした。

「な、何でしょう？ 中井先生」

それから一連の乙女らしからぬ挙措を恥じらいつつ声の主に向き直り、用件を訊ねた。相手は私をしても見上げる長身の教師だった。

「今日の午後練習は二時からに変更だから。皆にも伝えておいてくれ」

彼はその身長から推して測れる通り、私の所属するバレーボール部の顧問を担当している。

「はい。わかりました」

事務的な言葉に事務的に頷く。それだけで用は済んだらしく踵を返そうとする中井先生を私は呼びとめた。

「そうだ、先生。今日、何の日か知ってます？」

思いもよらなかったのか「今日？」と目を丸くする先生。しかしすぐに合点がいったらしく、見透かしたような笑みを浮かべて答える。「ハロウィンか。まさか、お菓子を買ってくれとか言うんじゃないだろうな」

「い、言いませんよ！いくらお金がないからって」

「お金、ないのか？」

しまった、と内心で焦りを覚える。質問の意図を誤解されたことに慌て、必死に弁解するあまり、余計なことまで口走ってしまった。

「あ、いえ。財布を忘れてしまっただけです」

咄嗟にそう言い訳をすると

「しっかりしてくれよ。部長」

と先生は私を嗜めるように言う。

「はい。気をつけます」

恐縮して身を縮ませる私に苦笑を浮かべた後、先生は教室を後にするのだった。

大袈裟に嘆息すると、私は脱力して椅子に座りこむ。そんな私を案じて、ハワードは顔を覗き込んできた。

「トミー。大丈夫？ 何だか元気ない。お金ないから？」

そうではない。だが、それも悩ましい問題であることは紛れもない事実だった。

「そんなところ。まさか土曜授業があるとは思わなかったから……」

本来給料日である今日が土曜日なので、給与は前日の金曜に振り込まれるものだとばかり思っていた。そして昨日、浮足立ってお金を下ろしに行った私が振り込みの無い通帳を目にして翌月曜日にお金が振り込まれることを悟ったとき、もはや財布には一食分の銭も残されていなかったのだ。

午前中の授業だけ、或いは午後からの部活だけであれば何も問題はないのだが、生憎本日は午前中の授業に加えて午後の練習がある。できることなら忘れたい、しかしそうも言っていられない問題だった。

「じゃあ中井先生に奢ってもらったら。幼馴染なんですよ」
すると、名案とばかりにハワードが提言する。

「……幼馴染なんて言葉よく知ってるわね」

その提案に言及するよりも前に、私はそれが気にかかった。ハワードは事も無げに答える。

「トミー貸してくれたあの漫画にも出てきた」

「……なるほど」

思わず納得した。確かに少女漫画に幼馴染はつきものか。

とりわけ、私の集めている漫画は幼馴染が題材の作品に偏っている気がした。

「先生きつと奢ってくれる」

鼻高々に掲げられたハワードの案を、私はやんわりと却下する。

「中井先生は駄目。鼻屑はしない人だから」

「ヒイキ？」

聞きなれない言葉にポカンとするハワードにもわかるよう説明をする。

「そう。私にお菓子をあげたら、先生は皆にもあげなくちゃいけなくなるでしょ？だから、私だけに御馳走するわけにはいかないってこと」

「でも、幼馴染はトミーだけなんですよ。トミーだけにお菓子あげるのはおかしくない」

ハワードはいまいち納得がいていないようだった。私は半ば自分に言い聞かせるように言う。

「先生にとって私は、幼馴染じゃなくて生徒の一人でしかないの」
臍負も何もない。結局のところ、それが真の理由だった。

思ったより強く言い過ぎたのか、ハワードは肩を落としてしまう。それから躊躇いがちに口火を切り

「ごめん、トミー……。お金あればボクが奢るのに」

などとの外れなことを言い出した。見当違いのことで消沈するハワードに私はつつい吹き出してしまう。私は彼の憂いを吹き飛ばすつもりで努めて明るく言つてのけた。

「何言ってるの。大丈夫よ。なんとかなるから」

元より私が思い悩んでいるのはお金のことではないのだから。

それよりも気になったのは先のハワードの発言だった。

「というか、ハワードもお金ないの？」

「うん。使いすぎてしまった」

「そういえば最近よく有季たちと遊んでるわね。それが原因？」

有季とは、他のクラスで学級委員をやっている私の中学校からの友人である。おしゃべりな有季は日本語が喋れなかったハワードにとって天敵のような存在だったが、今の彼には良い話し相手になっているようだった。

その彼女を含めた数人とハワードは最近よく一緒に遊んでいるらしい。如何せん何をしているのかは想像もつかないが、そのせいで

金がなくなってしまうとなれば世話役として黙っているわけにはいかない。

そんな私の腹積もりを察してか、ハワードは決まりが悪そうに目を逸らしている。

「一体何してるの？」

沈黙を肯定ととって問い詰めるのだが、ハワードは

「それは、言えない。男の約束」

などとおかしなことを言い出す。

「有季は女でしょ。また変な言葉覚えて」

と私が間違いを正してやると、ハワードは真顔で答えた。

「ユキが教えてくれた」

「……あの子は」

ハワードを有季と引き合わせたことに後悔の念を抱かざるをえない。お金のこともそうだが、今後ハワードが誤った日本語と文化を学んだりしないためにも私がしっかりせねばと決意を新たにしつつ、詰問されて委縮してしまったハワードに言葉を掛ける。

「まあいいわ。有季も楽しそうにしているなら」

「ユキは、どうかした？」

私の言葉の真意がわからず首を傾げるハワードに事情を説明する。

「有季、澄人が学校辞めちゃってから元気なかったからさ」

慣れ親しんだ人物の名前にハワードは表情を明るくして訊ねてきた。
「スミトは元気してる？」

澄人とは中井先生の弟、つまりは私の幼馴染であり、有季の想い人だった。今年の夏休みまでは私や有季、それにハワードと一緒によく遊んでいたのだが、二学期から学校に来なくなり、少しして自主退学をしたと聞かされた。私もハワードも当然驚いたが、それ以上にはショックを受けていたのが有季だったのだ。

「私も会ってない」

「幼馴染なの？」

「幼馴染だからって特別じゃないわよ。中井先生も教えてくれなか

ったし」

中井先生は澄人の自主退学以外のことは教えてくれず、退学の理由も、今どうしているかも結局わからずじまいである。そのことは余計に有季を苦悩させた。

「とにかく、有季は今落ち込んでるから、一緒にいるハワードが元気づけてあげること」

文化祭の盛り上がりでうやむやになったものの、有季は未だに澄人のことで思い悩んでいる。私が気を利かせたところで、付き合いの長い彼女には私の励まそうという意図を見透かされてしまうだろう。

そんな彼女を励ますのには、ハワードの方が適任だと思ったのだ。

ハワードは威勢よく

「オーケイ」

と、承服したかと思うと、すぐに自信なさげに肩を落とす。

「でも、ボク日本語喋るのそこまで上手じゃない……」

思いをそのまま日本語で伝えられるほどにハワードは日本語が達者ではない。その思いが真剣であるが故に、それを痛感してほぞを噛む彼に

「メールとか手紙でもいいのよ」

と、私は檄を飛ばしてやる。するとハワードは光明を得たりと表情を輝かせて声を上げる。

「ナイスアイデア！」

口をついて出た流暢な英語がハワードの興奮を物語っていた。俄然やる気ハワードはにつこりと笑みを浮かべながら

「でも、トミーは凄いね。勉強もできて、部活にアルバイトに文化祭実行委員にボクの面倒に……。自分も大変なのにユキの心配までしてる」

と、言うのだった。

その賛辞を、素直に私は受けられない。

「そんなことない。大したことない」

代わりに、私はそんな謙遜の言葉を口にしていた。

。

「乗り切った……」

ほとんど溜息のような声で、そう呟く。時刻は既に午後六時を回っていた。

外を見れば日はとくに暮れて、夜の帳が下りている。

一月ほど前、文化祭の時期はこの時間でも校内に活気があった。バイトも部活もある中、文化祭実行委員を買って出た私は、目が回るような毎日を送っていたのを今でも覚えている。

それが今は、祭りがあったことが嘘のような静けさだった。あるいは夢のようなものだったのかもしれない。多くの人の記憶から、いずれは忘れられてしまう。その夢を作り上げるための努力も、誰に評価されるでもなく、忘れ去られていくのだろう。

別にそれでも構わなかった。

私は中井先生に褒めてもらうことができれば、それでよかったのだから。

中井先生は、昔から何でもできる優秀な人だった。何をやっても人並以上にこなす、そんなあの人には在りし日の私は憧れ、あの人に褒められる事に何よりも喜びを感じた。

誰の賛辞よりも先生の賛辞を求めて、私は日々の研鑽を惜しまなかった。結果はちゃんとしてきて、その度に先生は褒めてくれた。そうして私はより一層努力を重ねた。

いつしか私は先生に褒めてもらうために優秀であることにこだわるようになっていたのだ。

だが次第に、先生は私のことを褒めてくれなくなっていた。

「花村」

「は、はい」

体育館から校舎へ続く渡り廊下で、帰り際の中井先生が声を掛け

てきた。先生は時間を気にしているのか、時計に目をやりつつ要件を告げる。

「明日の練習試合は一年生も使っていくから、いつも以上にしっかりな。あと、良い動きするやつもチェックしておけ」

「はい、わかりました」

早口で喋り切ると先生は

「じゃあ明日、よろしくな。花村」

ありきたりな挨拶の後、返事も待たずに急ぎ足で行ってしまった。

その背中に、力なく

「……お疲れ様でした」

と返す。聞こえなかったのだろう。返答はなかった。

私も帰途につくために、おもむろに歩き出す。

名前も呼ばれず、褒めてももらえず、それでも私は努力を続けるほかなかった。

ハワードの世話を引き受けたのも、本当はあの人が褒めてくれると思ったから。

バイトも部活もあるのに文化祭の実行委員を買って出たのも、褒めてもらえると買ったから。

有季のことを心配しているのだって、結局は先生に褒めてもらいたいだけなのだ。

そうして、少しでも、先生にとって私が特別であれたら。そう願ってやまなかった。

だが今にして思えば、褒められなくなって、ミコトと呼ばれなくなったときから、私は先生にとって特別でもなんでもなくなっていたのだろう。

澄人の一件で、それを思い知らされた。

だから、期待をするのは今日までと決めていた。

今日、十月三十一日なら、先生はきつと私の望んだ言葉をくれると信じていたから。

それも、ついぞ叶わなかった。

「あーあ。バツカみたい……」

文化祭という夢から覚めたような校舎を歩いていたせいだろうか、或いは今日までと心に決めていたからだろうか。私自身、先生への想いが夢であったように、あっさりと吹っ切れていた。

結局私は、少女漫画の真似事をしていただけなのかもしれない。見上げられる相手への恋に恋をしていたのだろう。

冷静になってみれば、諦めてしまふのは簡単だった。

でも、諦めてしまったら、今までの努力一体どうなるのだろうか。私は何のために、今まで努力を重ねてきたのだろうか。

それを思うと、空虚な気持ちで一杯になるのだった。

「トミー」

あれこれと考え巡らせながら俯き加減に歩いているところに、突然今のところ一人しか使わない呼び名で呼ばれた。顔を上げると、そこにはとくに下校したはずのハワードがいた。

「ハワード？まだ帰ってなかったの？」

驚き訊ねると、ハワードは待ち侘びたようにニコニコしながら答えた。

「トミーを待ってた」

「どういうこと？」

「いいから、ちょっと来て」

「何？何なの？」

さっぱり事情が呑み込めない私を、珍しくハワードは強引に引っ張る。向かった先は何のことはない、下駄箱だった。

「もう。一体何が……」

練習後のへこたれた体に鞭打って下駄箱に辿りついた私の目に飛び込んできたのは、下駄箱の前に山積みになった何かだった。

「……何これ」

近づいてよく見てみると、それはお菓子の山だった。クッキー、煎餅、チョコレート、飴にポテトチップスと種類は様々だ。そしてそれらのお菓子は私の下駄箱にもいっぱい詰まっている。

「……なんか、漫画みたいになってる」

それはさながら、学校中の女子からチョコレートをもらう漫画に出てきそうな光景だった。私のその感想にいたく満足したのか

「凄いだろ？」

とハワードは得意げになる。

「確かに凄いけど」

凄いけど意味がわからない。私が漫画好きだから、ということだろうか。それにしても今日はハロウィンであってバレンタインではないのだが。

「どうしたの、これ？」

戸惑いつつ問いかけると、ハワードは答える代りに、顔いっぱい満面の笑みを浮かべて

「文化祭実行委員、お疲れ様」

と言っただった。

「え？」

予想外の答えに、私は間抜けな声を上げてしまう。

「文化祭が終わったのって一ヶ月も前だけど……」

「これがやりたくて、本当はバレンタインにやろうってクラスの皆と決めてた。でもボクはトリックオアトリートって言われちゃったから、今日にしようと思って」

これ、とはこの山積みお菓子のことか。確かにサプライズとしては上出来な部類だろう。クラスの皆で考えたというのか。

皆、私が実行委員だったことなどつくに忘れていると思っていたのに。

「あと、クラスの皆『頼りにしてるから、もっと頼ってくれ』って言ってた。……トミー？もしかして嬉しくなかった？」

言葉を失くした私を不安げにハワードは覗きこんでくる。私はすぐに頭を振った。

「うっん。嬉しい」

それ以外に、この気持ちを表す言葉などありはしなかった。

初めから何も心配はいらなかったのだ。私の努力は、ちゃんと誰かが意味を与えてくれる。それがわかったただけで、今までの努力もそしてこれからの努力も、決して無駄にはならないだろう。

「頑張つてて、良かった……」

万感の思いを込めてそう呟くと、

「よかった」

と、ハワードも一緒になつて顔を綻ばせた。

「というか、これのただけに待つてたの？」

安堵しているハワードに呆れつつ聞いてみると、彼は大笑に「ノー」と否定した後で

「元々の用事はこつち」

と言つて、両手で持った箱を差し出してきた。

「何これ？」

訊ねるとハワードが開けるように促す。私は訝しみつつも、箱を開けてみた。

下駄箱のお菓子でこれ以上ないくらいに驚いた私は、その箱の中身に更に驚かされる。

「これ……。どうして……？」

「ユキに手伝つてもらった」

なるほど道理で、箱の中にあつたのは、随分と綺麗な出来ホールケーキだった。

「いや、そうじゃなくて」

問題はそのケーキに

「なんで？なんで私の誕生日知ってるの？」

ハッピーバースデーと書かれたチョコが乗っていたことである。

驚きのあまり上手く言葉を継げない私に対して、ハワードはいたつて落ち着いている。

「トミー自分で言つてた。名前の漢字教えてくれたとき」

十月三十一日。十月に生まれた美しい子。

確かにそう教えた。だが、ろくに日本語も喋れず、私の名前さえ満

足に呼ぶことができなかったハワードが、よもや誕生日を覚えていようとは思ってもよらなかったのだ。

だって、中井先生でさえ、覚えていなかったというのに。

「それと、これ」

「手紙？」

未だ混乱状態から立ち直れない私に、ハワードは封筒を差し出してきた。中から便箋を取り出している最中にハワードが事情を話している。

「トミー、最近元気なかったから。上手く喋れないボクでも、手紙かメールならってトミーが教えてくれたから、急いで書いた」

あれは有季を元気づけるために言ったのに、ハワードは私に書くこうとしてあんなに張り切っていたというのか。

今朝の出来事を思い起こしつつ手紙を広げると、そっと目を通す。

そこには不慣れな字でこんなことが書かれていた。

十美子へ

こうして日本語で手紙を書けるようになったのも、十美子のおかげです。

それだけでなく、お話ができるようになったのがとても楽しいです。手紙やメールとちがって、十美子の笑ったり怒ったりするかおが見られてうれしいです。

でもかなしいかおや、つらそうなかおも見えてしまうのがかなしいです。

とくにさいきんの十美子は元気がなくてしんぱいです。なんとか笑ってほしくて、ぼくにできることをかんがえましたが、思いつきませんでした。

それで十美子におしえてもらったとおり、てがみをかきました。けっきょくぼくは十美子にたすけられてばかりです。

やっぱり十美子はすごいです。でも十美子がすごいのはいつも、と

ても頑張っているからだと思っています。

だからばくにできることは少ないけど、十美子に笑ってもらうためにぼくもがんばります。

さいごに、たんじょうびおめでとう。

ハワードより

手紙をハワードへと突っ返す。

顔から火が出るという言葉はこういうときに使うのだろう。あまりの気恥かしさに耳まで赤くなっているであろうことは容易に想像がついた。それを悟られまいとハワードに背を向けると、彼は

「トミコへ」

あろうことか、声に出して手紙を読み始めた。

「お、音読するな！ 恥ずかしい」

慌てて振り返って手紙を奪い取る。

「恥ずかしい？ どうして」

と真剣に首を傾げているハワードに私は大声を張り上げていた。

「日本語でこういうことを言うと恥ずかしいの」

『アイラブユー』と『愛してる』は同じ意味でも、同じように使えらるゝとは限らないのだ。ハワードは私の剣幕にうつむいたかと思うと

「To Tomiko……」

と滑らかにそらんじだした。

「英語で読めばいいとは言っていない！ 手紙は口で言にくいことを書くんだから、それを読んだら意味ないでしょ」

まるでわかっているハワードに私が一気にまくしたててやると

「この前テレビで読んだ」とハワードはしきりに首を捻っているのだった。

どうやらこのアメリカ人に奥ゆかしさというものを理解させるのはまだ無理のようだ。私はとにかく簡潔に講釈する。

「とにかく、手紙は手紙。口で伝えるのは『お誕生日おめでとう』

くらいで充分よ」

黙読であれだけこそばゆいだから、口に出されたらもういてもたってもいられなくなることは必至である。私の要望にハワードは「わかった」と素直に首肯し

「……誕生日おめでとう。トミコ」

と、今日一日、私が何より待ち望んでいた言葉をくれたのだった。

ハワードの頭は、簀のところにいる私より少しだけ高い位置にある。そのせいもあってちよつと少女漫画みたいだなと思ったのだが「あ、ごめん。ミコトがよかった？」

ハワードが取りも直さず慌てて謝ってきたおかげで台無しになってしまうのだった。

でもそれが、私にはお似合いか。そんな風に考えつつ、簀から廊下に移り、同じ高さになったハワードに笑って答える。

「……いいわよ、トミコで」

だって、私が本当に欲しかった言葉は、十美子へのこの手紙に全部書いてあるのだから。それなら私は十美子でいる方がいいのだろう。

これからも、十美子の欲しい言葉を、ハワードがくれるのなら。これからは、十美子として、同じ高さの恋を試してみるのもいいかもしれない。

そんな風に思えたのだ。

ハロウィン（後書き）

オマケに続くかもしれません。

Noname(前書き)

学園祭後の話です

No Name

「ぴんぽんぱんぽーん。時刻は午前4時を回りました。皆々様、ラジオのお時間でございます。パーソナリティを務めさせていただきますのは、ねこくんこと島根幸田でございます。みなさま初めまして」

ヘッドフォンとブースの外の小スペースに僕の声が響く。誰が聞いているわけでもない。しかし興奮と緊張で呼吸が少しだけ早くなる。「初めましてと言えば、実は僕、一人で喋るのは初めてなものです。おまけに生放送ということで少々緊張しております。口調も心なしかおかしい気もしますが、広い目…もとい、広い耳でお聞き下さい」

学園祭が終わり片付けを翌日に控え、皆が騒いだ疲れを睡眠で癒している中、僕はラジオスタジオに来ていた。我がラジオサークル「On Air」の片付けといえば精々機材をしまう程度であり、その気になれば学園祭終了直後に片付けることだって可能だ。と言うか、毎年学祭が終わってすぐ片付けているし、今年も例外なく片付けた。だから本来ならこうやってラジオを録ることなんて不可能なのだが、僕が最小限の機材だけを再びスタジオに運び出しセッティングし直したのだ。身勝手な行動だが、実は片付けをしている時点では既に計画していたことだった。しかし改めて機材のセッティングを一人でしてみると、入部1年目で先輩に頼ってばかりであった昨年の自分とはちゃんとおさらば出来たのだなと実感する。

そんなことを考えながら、いざ話したそうとした途端ドアが開いた。

「困った後輩ね。わざわざみんなで片付けた機材を出しちゃって」

ま、私らにはもう関係ないけどねと呟きながら、来訪者は椅子に腰掛ける。そしてバックからおもむろにマイクとヘッドフォンを取り出しセッットし始めた。

「みなさん初めまして。ラジオサークルOnAir前部長のあーねこと水谷彩音です」

向かいに座った来訪者、もといあーねは僕の顔を見ながら笑顔で自己紹介をする。当然自分に向けられた言葉ではないのだが、幼馴染かつ高校時代の恩人である彼女にこちらを向かれて自己紹介されるのは少しむず痒くなる。

「あの、」

「飛び入りゲストなんて生放送的にはおいしいでしょ？」

僕があからさまに嫌そうな顔をするのをしれっと流し、笑顔で居座るあーねえ。

「……ということで、ゲストさんです」

「よろしく願います！」

一人で喋るのが嫌だったので嬉しいと言えば嬉しいのだが、このラジオの意義から考えると何とも言えない複雑な心境である。まあ、マイペースと言うよりマイウェイなところは彼女の持ち味なのだが「さて、時間も勿体ないことだし、さっそく企画を進めていこう」

OnAirでは学園祭を区切りに3年生は引退してしまうため彼女は実質OGなのだが、

後輩を立てる気がないのか引退した気がないのかグイグイ引っ張ろうとする。これは、気合入れないと番組持つて行かれるな。

「ゲストなのに仕切らないで下さい」

「ごめんごめん。それで？最初は何の話題から話すの？」

珍しくピシヤリと言った僕に悪びれた様子もなく謝るあーねえ。仕方ないので諦めて進行に徹しよう。

「最初は、このラジオのタイトルについてです」

「タイトルについて？そういうえば、そもそもこのラジオにタイトルなんてあったの？」

「いえ、ありません。今から考えます」

「……適当ね」

彼女は呆れ顔で僕の方を見ているが、そんなこと重々承知なのでさ

らりと流す。

「何がいいでしょう？ねこらじおとかだとありきたりですし」

「ねこは新部長なんだからさ。部長としてラジオOnAirの名前をもらってよ」

新部長、という言葉に少しどきりとする。昔から僕を引っ張ってくれたあーねえは既に一歩後にいて、あーねえが見守る中僕がみんなを引っ張っていかなければならないことを意識させられる。

「ラジオOnAirはちゃんと引き継ぎますよ。このラジオは今朝限定、一回キリのラジオです」

「一回キリのラジオにわざわざタイトルをつけるの？」

「ラジオでも何でも、タイトルって重要なフアクターだと思うのですよ。タイトルの無いラジオなんて、ただの音声です」

「まあ、確かにそうかもしれないけど」

そんなこだわらなくても、とでも言いたげな彼女。何でも形から入ろうとする僕だが、このラジオに関しては、別に彼女の意思を尊重して進行してしまってもいいかもしれないと思う。

「でもまあ、途中で思いつくかもしれないのでとりあえず次行きま
す」

「はい、お願いします」

次に考えていたことを思い出し、ふと嫌な予感がする。ゲストなんてイレギュラー考えてもいなかったが、反応が予測できてしまう。

「突然ですが！今日はなんとお便りを一通頂いております」

「本当に！？」

「ラジオネーム、猫大好きさんからいただきました。ありがとうございます」

「……」

予想通りの反応。勢いで押そうとしても無理なものは無理だった。

「なんですか、その冷たい目は」

「いや、自分で書くにしたってそのラジオネームはあんまりなんじや……」

「別に猫って僕のことじゃないですよ！？動物の猫のことです！」

「まあ、どっちでもいいわよ。早く読んで」

「はいはい。ねこくん、おはようございます！はい、おはようございます。昨日は学園祭ということでしたが、どうでしたか？楽しかったですか？是非感想をお聞かせください。あー、学園祭ね」

「ねこくん、えらい緊張してたよね」

「自分のことを棚に上げてにやにやしながら僕を見るのはやめてください」

「だって事実だし」

嬉しそうな顔で僕を攻め立てるあーねえ。とても先輩のやることは思えない。

「そりゃ、公共の電波で流すっていうし、インターネット配信までするし、緊張しますよ」

「まあ、かくいう私も緊張していたけど、それ以上に楽しかったなあ」

まだ終わったばかりなので興奮冷めぬといった感じで盛り上がる二人。

「ゲストの件はいろいろ大変でしたけどね」

「そうそう！ADの子にゲスト呼びたいって相談したら、外人の子連れてくるんだもん」

「英語で簡単な質問したんだけど、僕らが解答を聞き取れなくて断念したんですよ……」

「でも、いろんな人がゲストに来てくれてよかったよね」

「そうそう、中にはコスプレしている子とかもいてさ、客引きも大変そうだなあって思いましたよ」

「ねこくん、コスプレしてる子がいる間終始鼻の下伸ばしっぱなしだったよね」

「あることないことポンポン言うのやめてください」

僕のイメージが下がります。誰が聞いているわけでもないけど。

「思い返せばラジオの思い出ばかりだけど、学園祭、楽しかった

わよね」

「時に先輩。若さって何でしょう？」

「何？藪から棒に」

「ほとぼしる青春？後先を省みず勢いで進む行動力？」

「それもこれも正解でしょう。恥ずかしい言い方をすれば、青春に答えなんてないのだから」

「その恥ずかしい言動もまた青春ですかね」

「どちらかと言えば思春期っぽいけどね」

そう言っていると、先輩はにやりと口を吊り上げ僕を見た。

「若さとは、可能性だろう」

「うーん、自信満々で言い放つても、台詞はやっぱり思春期ですね」

「それを年下のあんたに言われるのだから、立つ瀬がないわね」

「それでは次のコーナーに移りたいと思います。ゲストのあーねえ、ありがとうございますー」

「え、私追い出されるの！？」

学園祭で使用したCMをそのまま流し、マイクの音を一旦切る。

「次のコーナーはどうしても自分一人でやりたいんです。お願いします」

「まあ、もともと予定のないゲストだったものね。……楽しかったわ、ありがとう」

そう言っていると、あーねえはささっとブースから出てくれた。申し訳ないが、こればかりは先輩がいるとやりづらい。僕は再びマイクの音量を上げ、深く息を吸った。

「次のコーナーは、エンディングです」

僕はあーねえがいた席を眺めながら『会話』を続ける。

「準備に何ヶ月もかけた学園祭もあつと言う間に終わってしまい、今日みんなが起きてしまったら跡形もなく片付けられてしまいます。当然そうあるべきだし、みんなだって寂しいはずです。ところで、サークルOnAirは学園祭で先輩たちが卒業してしまいます。ずっと一緒にラジオをやってきたあーねえも、他の先輩方も、みんな

片付けが終わった後、卒業式をやるのが恒例なのですが、先輩方、泣いていました。僕自身は泣かなかったのですが、それは単に実感が沸かなかっただけなのかもしれません。先輩方はまだ学校に在籍しているし、会えなくなるわけではないのですが、片付けが終わってみんなが帰った後、急に胸が苦しくなりました。さっきまで一緒に騒いでいたあの人達は、もう僕らと同じ場所には居ないんだって思えてきて、涙も出てきました。仕事自体には何も不安は無いし、むしろ自分たちの好きなように出来るんだって考えると嬉しいくらいです。でも、それでも寂しく思うのは、先輩方と仕事仲間以上の関係になれたってことなんですよね」

話しながら、昔のことが頭に浮かんできてくる。あーねえとは小さい時からずっと一緒にいて、幼い頃からずっと引っぱ張っていつてもらっていた。優柔不断な僕に、物事を簡単に決めすぎるあーねえ。簡単に事を運びすぎて時々不安になることもあったけれど、それでもあーねえには付いてくる者に安心感を与える不思議な雰囲気があった。「サークルで仕事って言い方は変かもしれませんが、僕にとってラジオは仕事だったんです。最初にOn Airに入った時、僕はこのサークルが好きではありませんでした。あーねえは、高校の時の軽音楽部の部長で、当時一緒にバンドを組んでいました」

一緒に組んでいたと言うよりは、ライブ前にメンバーの欠けた僕らのバンドに参加してくれたのだが。あーねえはいつもそうやって僕が困っていると助けてくれる。男としてはちよっと立つ瀬がないなとも思うが、とても恩を感じている。

「それで、たまたま同じ大学に入学したので一緒にまた同じサークルに入ってバンドを組みたいと思っていたら、あーねえ、バンドやらずにラジオ録ってたんです。当時のOn Airと言えば、人数も少なく、機材の知識もみんなあまりなくて、そもそもサークルですらなく同好会でした。でも、あーねえにどうしても入って欲しいと頼まれて、断ることができませんでした」

正直、嬉しかった。いつも僕が頼ってしまっているあーねえが、今

度は僕を頼ってくれている。だからこそ、期待に答えたかった。

「だから、入ってもあくまでラジオは仕事で、活動時間以外はOn Airの人とも付き合いませんでした。それが、いろいろあって、みんなで本気でラジオを作ることになって、それが本当に楽しくて、感情に任せ勢いで話してしまったことに気づき、僕は一度ゆっくり呼吸をする。」

「話が少し逸れてしまいましたね。要は、僕、On Air大好きなんです。ラジオ、大好きなんです。だから、聞いていてください。僕らの声は、ラジオを通して聞けますから！」

なんだか、不思議な気分だった。離れて行ってしまうのに一緒のようないふり。

「あーねえ、On Airは僕がこれから頑張って引っ張って行くから。だから、どうか聞いていて下さい」

聞いているかどうかわからないが、これが僕の今の気持ちであり、ラジオをわざわざやった意義でもある。

「……はい、湿っぽくなってしまいましたがこれにてお開きです。また会える日まで、さようなら」

ラジオが終わり、辺りがまた静かになる。寂しがり屋な後輩も、気持ちの整理がついたようだ。

「邪魔、しちゃったかなあ」

卒業なんてまだまだ実感なくて、ねこくとまだまだ騒ぎたくて乱入しちゃったけど、彼としてはお別れラジオだったようだ。私達卒業メンバーよりも現メンバーの方が私たちの引退を強く感じていて、優柔不断で弱気なねこくんは自分なりのやり方で決意を示してくれた。でも、これは決してお別れなんかじゃなくて、パーソナリティからリスナーになるけれど、今ではWeb上でだってラジオが配信

出来る世の中なのだ。

今まで通りずっと繋がってられる。そう考えると、やっぱりラジオって素晴らしい。

大きく背伸びをし、大学が用意してくれた寝部屋へと移動する。最後にもう一度だけスタジオの方へ振り向き呟いた。

「またね」

そう。また次のラジオの配信日までは、さようなら。

NoName(後書き)

オマケに続くかもしれません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9166s/>

日常トリム

2011年12月2日19時46分発行